

寝屋川市高宮所在

讃良郡条里遺跡（その2）

第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

讃良郡条里遺跡は寝屋川市東部に位置し、条里型地割が最近まで良好な形で残っていたことから命名された遺跡です。第二京阪道路の建設に伴って、この遺跡の東部と小路遺跡・高宮遺跡にまたがる枚方丘陵西縁から沖積地において、平成12年度から調査を行っています。

本書で報告する（その2）調査区の成果で特筆されるのは、縄文時代前期の石器製作址が検出されたことです。周辺に所在する縄文時代遺跡としては、中期の集落である讃良川遺跡が著名ですが、今回見つかったものはそれよりも古く、この地域における縄文時代集落の展開を考える上でも重要な手がかりになるといえます。この調査区の周辺でも同時に発掘調査が行われましたが、そこからも同時期の遺物が出土しており、調査地域全体で当時の人間活動を復原していくことが課題です。また、これまでの調査で縄文時代の古環境変遷に関わる資料も得られており、自然環境と人々の生活との関係についても今後明らかにしていく必要があります。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。

2003年6月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、第二京阪道路（大阪北道路）建設予定地のうち、寝屋川市高宮に所在する讚良郡条里遺跡（その2）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査は、調査部長玉井功、中部調査事務所長藤田憲司、同所調査第一係長一瀬和夫の指示のもと、中部調査事務所調査第一係技師井上智博・専門調査員多賀晴司が担当した。
3. 現地調査は平成14年3月22日～9月13日に実施した。
4. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影・写真の焼付に関しては、中部調査事務所主査片山彰一・調査補助員水取康人が担当した。
5. 本書の編集は井上が行った。また、本文の文責については目次に記した。

凡 例

1. 今回の発掘調査は日本測地系にもとづいた地区割を用いておこなったため、平面図・遺構実測図に記された座標値は日本測地系の国土座標第VI系を基準とした値である。また、方位は全て座標北を示している。
ちなみに、航空測量図（図25）における北東隅の座標は、日本測地系の場合、 $X = -138,565$ 、 $Y = -32,985$ であるが、世界測地系では $X = -138,218.294$ 、 $Y = -33,246.114$ である。
2. 調査で使用した水準は、T.P.（東京湾平均海面）である。
3. 地層の記載のうち、色調に関しては、小川忠正・竹原秀雄『新版標準土色帖第24版』2002年版を使用した。

目 次

第1章 調査の経過と調査方法	(井上)	1
第2章 位置と環境	(多賀・井上)	3
第3章 層序と遺構面の認識	(井上)	6
第4章 遺構・遺物	(井上)	11
第5章 まとめ	(井上)	30

挿 図 ・ 表 索 引

図1 調査区位置図	1	図14 第3 b面遺構図	18
図2 調査区配置図	2	図15 第4 - 1面～第4 - 2 a面平面図	19
図3 調査地周辺等高線図	3	図16 48・52 (流路) 断面図	20
図4 讚良郡条里遺跡と周辺の遺跡	4	図17 第2 - 1 a層～第3 b面出土遺物	21
図5 北側断面実測図	7	図18 48 (流路) 出土遺物	22
図6 下層確認トレンチ断面図	8	図19 西側下層確認トレンチ石器出土状況	23・24
図7 粒度分析結果	9	図20 西側下層確認トレンチ断面図	25
図8 第2 - 1 b面・第2 - 2 b面平面図	12	図21 排土採取位置図	26
図9 12 (溝) 断面図	13	図22 ブロック I 出土石器	27
図10 第2 - 3 b面平面図	14	図23 ブロック II 出土石器	28
図11 第2 - 3 b面 (古) 平面図	15	図24 下層確認トレンチ出土土器	29
図12 第2 - 3 b面 (古) 遺構図	15	図25 航空測量平面図	39
図13 第3 b面平面図	17	表1 出土石器一覧表	31

写真図版目次

写真図版1 断面

- 1 第1 a層～第4 - 2 a層 (図5, f - gライン, 南東から)
- 2 第2 - 1 a層～第4 - 2 a層 (図5, a - bライン, 南東から)
- 3 第4 b層～第5 - 4層 (図6, i - jライン, 西から)
- 4 第4 b層～第5 - 3 b層 (図6, k - lライン, 東から)

写真図版2 第2 - 2 b面 12 (溝)

- 5 12 (溝) 断面 (図9, a - a'ライン, 南から)
- 6 12 (溝) 埋積物の斜交層理の傾き (南から)
- 7 12 (溝) 断面 (図9, b - b'ライン, 南から)
- 8 12 (溝)・58 (土坑) の切り合い (南西から)

写真図版3 第2 - 3 b面遺構

- 9 調査区西半 第2 - 3 b面遺構断面 (南西から)
- 10 調査区西半 第2 - 3 b面遺構検出状況 (南から)
- 11 89 (溝) 底面の状況 (南から)
- 12 83 (溝) 土器出土状況 (南から)

写真図版4 第2 - 3 b面 (古)・第3 b面遺構

- 13 99 (建物) 全景 (東から)
- 14 調査区西半 第3 a層 (北から)
- 15 29 (土坑) 土器出土状況 (南から)
- 16 58 (土坑) 土器出土状況 (北西から)

写真図版5 第4 - 1～4 - 2 a面流路

- 17 48 (流路) 全景 (東から)
- 18 48 (流路) 断面 (北から)
- 19 52 (流路) 断面 (南東から)
- 20 106 (流路) 断面 (図20, b - b'ライン, 西から)

写真図版6 下層確認トレンチ

- 21 ブロック I 石器出土状況 (南西から)
- 22 ブロック II 石器出土状況 (北西から)
- 23 東側トレンチ 第5 - 2 a層 (南から)
- 24 西側トレンチ 第5 - 3 a面流路断面 (北から)

写真図版7 空中写真

調査区垂直写真

写真図版8 出土遺物①

- 12 (溝) 出土土器
- 28 (土坑) 出土石製品
- 83 (溝) 出土土器
- 第2 - 1 a層出土土器
- 29 (土坑) 出土土器

写真図版9 出土遺物②

- 58 (土坑), 37 (土坑) 出土土器
- ブロック I, 第5 - 4層出土土器

写真図版10 出土遺物③

ブロック I 出土石器

写真図版11 出土遺物④

ブロック II 出土石器

第1章 調査の経過と調査方法

今回報告するのは、第二京阪道路建設に伴って寝屋川市小路・高宮地内において実施した発掘調査の成果である。この地域では、2000年に小路遺跡の確認調査が実施されており、2001年には高宮遺跡の発掘調査がおこなわれた。そして2002年には、高宮遺跡（その2）・（その3）、小路遺跡（その2）・（その3）、讚良郡条里遺跡（その1）・（その2）・（その3）に分割して調査をおこなった（図1）。本書は、そのうちの讚良郡条里遺跡（その2）の発掘調査報告書である。

讚良郡条里遺跡（その2）は上記調査地域の北西隅にあたり、調査面積は544m²である。調査地内には民有地への進入路が存在しており、その通行を常時確保する必要があったため、調査地を3つに分割して調査を進めた。また、進入路を付け替えて調査したが、造成に伴う盛土が2m近く盛られていたため、安全勾配を確保した結果、中央に幅約3mの未調査部分が生じてしまった。

今回の調査における地区割は、(財)大阪文化財センター（1988）で制定された方法にもとづいている。したがって、平面図に記した座標値は日本測地系の国土座標第VI系を基準にしている。また、水準については、T.P.（東京湾平均海面）を使用している。

調査ではまず、盛土および盛土前の旧表土などを重機で掘削し、その後は1層ずつ人力で掘削して、遺物・遺構の検出に努めた。また、確認調査の成果から設計深度よりも下位の層準に縄文時代の遺物が含まれている可能性が考えられたため、最終遺構面の調査終了後、下層確認のためのトレンチを掘削し



図1 調査区位置図



図2 調査区配置図

た。下層確認トレンチは、調査地西側と東側の2ヶ所に設定した(図2)。このうち、西側のトレンチからは縄文時代前期後葉に属する石器製作跡が検出された。このトレンチについては、石器の分布範囲を確認するために拡張をおこなった。

参考文献

一瀬和夫・田中龍男ほか編 2002 『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』, (財)大阪府文化財センター, pp.33-62.

(財)大阪文化財センター 1988 『遺跡調査基本マニュアル』, 55p.

第2章 位置と環境

讃良郡条里遺跡は寝屋川市と四条畷市にまたがり、おおむね北と西が寝屋川、南が岡部川、東が枚方丘陵に囲まれた範囲に位置する。今回の調査地はこの遺跡の東部にあたる。

調査地は枚方丘陵に接する沖積地に立地している。枚方丘陵は大阪層群が撓曲して形成されたものであり、その縁辺には段丘面が存在している。また、南には枚方丘陵を刻む開析谷を集水域とする讃良川や楠根川が西に向かって流れている。現在の流路は人為的に固定されたものであるが、等高線をみてわかるように（図3）、これらの河川は谷から吐き出された堆積物によって形成された扇状地の上を流れている。この扇状地はこれらの前身となる流路によって形成されたと推定される。調査地はこの扇状地に位置しており、南西方向からの堆積物の供給が地形形成に影響を与えたと想定できる。この扇状地の形成過程についてはほとんど明らかになっていないが、第二京阪道路に伴う発掘調査によってそれを考えるための貴重なデータを得ることができると期待される。なお、調査地の北～北東にあたる丘陵斜面にも開析谷が複数認められ、そのうち2つのものには溜池が造られている。等高線図では、これらの谷から供給された堆積物によって扇状地や沖積錐が形成された様子は読み取れない。これは集水域が狭く、供給される土砂の量が少なかったことによると考えられる。

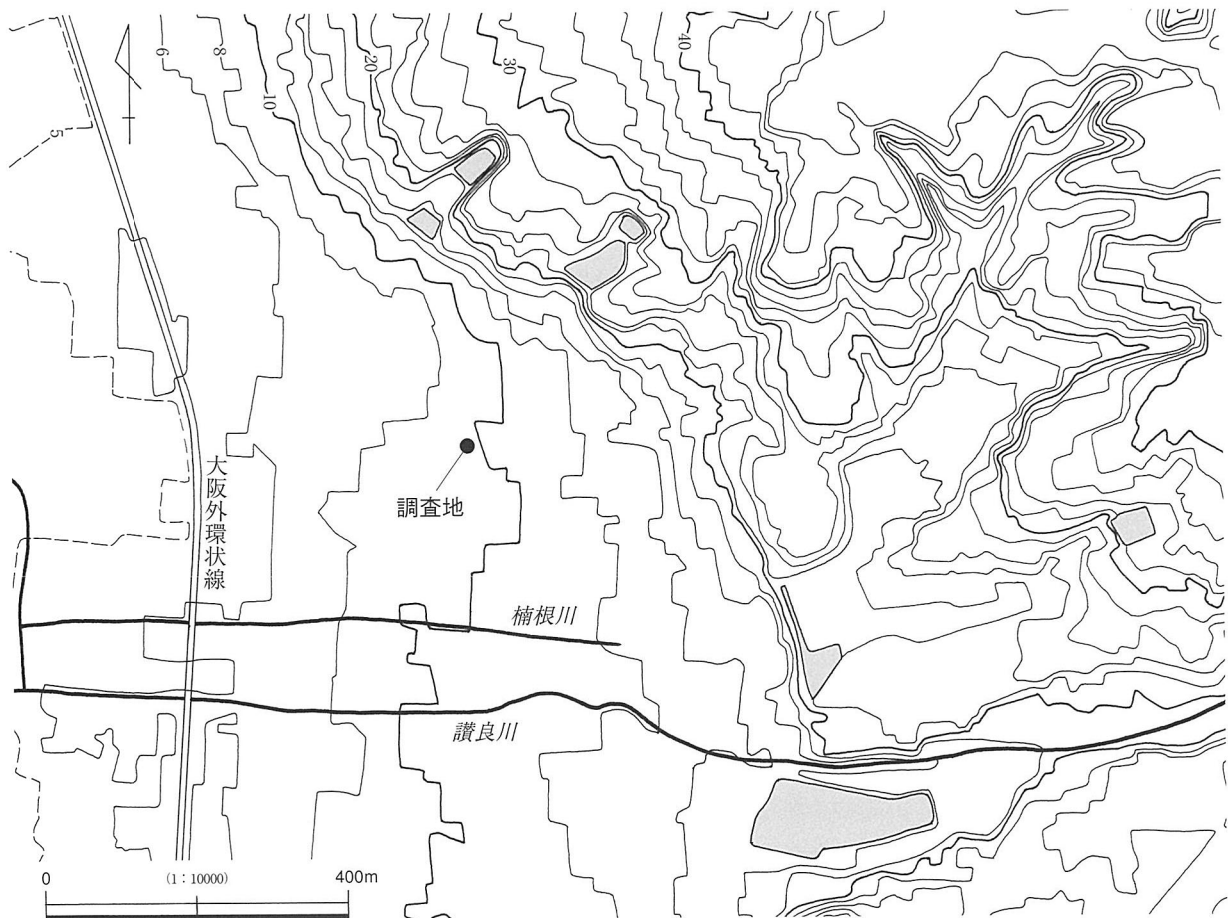


図3 調査地周辺等高線図

等高線は、寝屋川市史編纂委員会編1993『寝屋川市史』第1巻付図2「寝屋川市域等高線図」（前田 昇原図）による



ベースマップは国土地理院 1 : 50,000地形図【大阪東北部】

図4 讃良郡条里遺跡と周辺の遺跡

次に、調査地周辺の歴史的環境を概観しておきたい。

旧石器時代に関しては現在のところ遺物量は少ないが、讃良川河床遺跡においてナイフ形石器・スクレイパー・細石刃など、讃良川遺跡や高宮遺跡においてナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、遺跡の数は増加する。まず、高宮遺跡では、前期の北白川下層Ⅲ式～大歳山式土器が土坑から出土している。また、讃良川遺跡・更良岡山遺跡からはまとまった量の遺物・遺構が発見されている。両者は讃良川を挟んで接しており、寝屋川市に属する北岸は讃良川遺跡、四條畷市に属する南岸～上流は更良岡山遺跡と呼称されている。前者は中期、後者は後期～晩期を中心とする時期の遺跡である。讃良川遺跡では直径 2 m 前後の貯蔵穴が検出されている。また、大量に出土した船元式土器は、中期土器編年の基準資料のひとつとなっている。更良岡山遺跡では大形彫刻石棒やヒスイの石斧が出土しているほか、晩期の 27 基の土壙墓が検出されている。なお、第二京阪道路建設に伴う讃良郡条里遺跡の確認調査では、縄文時代中期前葉～中頃の土器が流路堆積物中から出土している。これらの土器は上流から流されてきたものであるが、出土地点から 200 m ほど離れた上流に位置している讃良川遺跡との関連も考えられる。また当地域では、小路遺跡や砂遺跡でも縄文時代の遺物が発見されている。

調査地周辺の弥生時代に属する遺跡としては、中期の集落である太秦遺跡が知られている。また、第

二京阪道路建設に伴う調査で、大尾遺跡において中期の方形周溝墓が検出されている。

また、古墳時代前期の遺跡としては、前方後円墳の忍岡古墳がある。この古墳からは鉄製武器類や碧玉製品が出土している。なお、当調査区と並行して調査をおこなった小路遺跡（その3）からは、庄内式期に属する前方後方形周溝墓が検出されている。

古代に属するものとしては、高宮廃寺がある。数次にわたる調査によって寺院の金堂・東塔・講堂・回廊・中門・南門の配置や規模が確認されている。瓦の編年からこの寺は、白鳳期に創建され、平安時代初頭に廃絶したと推定されている。また、鎌倉時代には講堂跡を本堂とする神宮寺が造営されたことも明らかになっている。また、当地域には高宮廃寺のほかにも、讃良寺跡・太秦廃寺・正法寺跡など、古代に造営された寺院が知られている。

当遺跡には条里型地割が明瞭に残っており、それが遺跡名の由来となっているが、地割の施工時期などについては明らかになっていない。今後は表層に残る地割だけを議論の対象にするのではなく、古代～中世の土地利用変遷について検討することが必要であろう。そのような検討にあたっては、発掘調査データが重要な役割をはたすと期待される。

参考文献

- 一瀬和夫・田中龍男ほか編 2002 『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』, (財)大阪府文化財センター, pp.12-13.
- 四条畷市史編纂室編 1967 『四条畷市史』第1巻, pp.871-883, 886-898.
- 寝屋川市教育委員会編 1991 『わたしたちのまち 寝屋川の自然』, pp.36-47.
- 寝屋川市史編纂委員会編 1998 『寝屋川市史』第1巻, pp.30-32, 52-98, 520-528, 540-566, 601-628.
- 野島 稔編 2000 『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』, 四条畷市教育委員会, pp.54-59, 69-73, 86-89.
- 宮野淳一 1992 『更良岡山遺跡発掘調査概要』, 大阪府教育委員会, pp.6-8.

第3章 層序と遺構面の認識

地層については、調査区周囲に掘削した側溝の壁面を使って検討をおこなった。これらの断面のうち、調査区北側のものが典型的な層序を示していたため、この部分を中心に実測をおこなった（図5）。

地層の観察方法については、井上編（2002）に示した方法に準拠している。すなわち、堆積物の特徴と古土壌に着目して層序番号をつけた。前者は調査地内の地形形成と密接に関連し、後者は過去の地表面の存在を知る手がかりになる。層序番号のうち、aを付したものは土壌層位を示し、bを付したものは土壌の母材となった堆積物を示す。また、土壌化していない層準でも、堆積環境の変化を追う上で重要な堆積単位については独立した層序番号をつけたが、その場合は番号の後にアルファベットを付していない。なお、断面観察の他に、各層準から試料を採取して粒度分析をおこない、肉眼による記載を補完するとともに、粒径組成の層位的変化を検討した（図7）。

遺構面については、遺構が土壌層位（a層）に関連して検出されることが多いことに着目し、層序に合わせて設定した。その際、趙（1995）で示された遺構面呼称も参考にし、a層上面を「a面」、a層下面を「b面」と呼称した。

次に、各層準の特徴を説明する。まず、第1 a層は中砂～細礫混じりシルトである。この層は盛土前の表土を構成する現代作土の下層土となっていたため、斑鉄が多く沈着していた。ただし、この層自体も擾乱を受けており、この層が作土であった時期もあったと考えられる。なお、この層は調査区西側ではほとんど残存しておらず、残存しなかった部分では第2 - 1 a層が現代作土の下層土となっていた。

第2 - 1 a層～第2 - 3 a層は砂礫混じりシルト層で、人為的に擾乱された水田ないし畠の作土層と考えられる。これらは間層を挟まずに接しており、上面はすべて削られていたが、下面からは耕作痕などの遺構が検出された。第2 - 3 b層は氾濫堆積物と考えられる砂礫層であるが、第2 - 3 a層段階の耕作の影響で部分的にしか残存していなかった。なお、調査区北西隅では、第2 - 3 b層が明瞭に残る部分があった。その部分では、粗砂～中礫の下にシルトが堆積しており、さらにその下にシルトブロックを含んだ粗砂～細礫が堆積していた。砂礫の間のシルト層は層厚が薄く、土壌化しているかどうかは不明であるが、シルトの上面で堆積間隙があった可能性が高く、シルトとその下の砂礫層を2 - 4層とした。なお、讚良郡条里遺跡（その3）においては、第2 a層の下に砂礫層が厚く堆積していたが、間に細粒の部分を含んでおり、細分できるようである。厚さは異なるものの、こうした状況は当調査区の第2 - 3 b層と第2 - 4層の関係と類似しているため、層序対比の指標になる可能性が高い。

第3 a層は有機物を多く含んだ古土壌（暗色帯）である。また、第3 b層は葉理の認められる砂礫層である。この層は、第4 - 1面流路部分では流路堆積物であるが、流路の周囲に堆積した氾濫堆積物に連続していた。また、この層は調査区東部では存在していなかった。第4 - 1層は砂混じりシルト層で有機物はほとんど含まない。流路の周囲では砂が多く混じるが、流路から離れるにつれて砂の量は少なくなる。また、埋没後に酸化鉄が沈着し、橙色を呈していた。第4 - 2 a層は有機物を多く含んだ古土壌（暗色帯）である。これらの地層については、必ずしも調査区全体で確認できたわけではない。第3 b層は第4 - 1面流路の周囲にしか残存しておらず、調査区東側では第3 a層と第4 - 2 a層が直接接していた。さらに、調査区南東隅では第3 a層が削られており、土坑の埋土として残存したにすぎなか

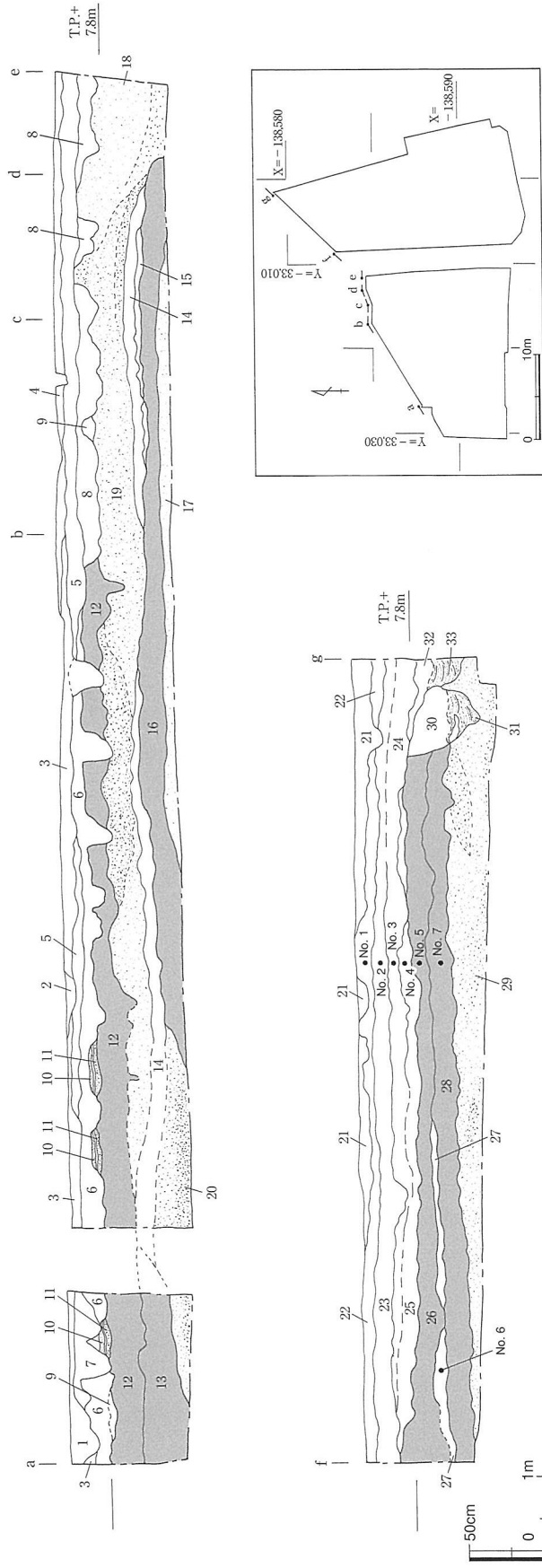


図5 北側断面地層図

- 1 2.5Y5/1 黄灰 中砂～細礫混じり極細砂質シルト (第1 a層)
- 2 7.5Y6/1 灰 極粗砂～細礫混じり細砂～極細砂質シルト 現代作土の溶脱層の一部
- 3 7.5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～細礫混じり極細砂質シルト～シルト 擾乱を受ける、糸根状・うん管状斑鉄あり (第2 - 1 a層)
- 4 10YR5/6 黄褐 中砂～細礫混じりシルト 斑鉄が多く、黄色を呈する (第1 a層)
- 5 5Y5/1 灰 中砂～細礫混じりシルト 斑鉄あり、擾乱を受ける (第2 - 2 a層)
- 6 7.5Y4/1 灰 中砂～細礫質細砂～シルト 擾乱を受ける (第2 - 3 a層)
- 7 7.5Y5/2 灰オリーブ 中砂～細礫混じり極細砂質シルト (第2 - 1 a層) と5Y5/1 灰色 シルト (第2 - 2 a層) がブロック状に混じる (第2 - 1 b面の遺構)
- 8 7.5Y4/1～7.5Y3/1 灰～オリーブ黒 中砂～細礫混じり細砂質シルト (第2 - 3 b面の溝埋土)
- 9 8と同一層だが砂礫の中にシルトのブロックが混じる (第2 - 3 b面の溝埋土)
- 10 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～中礫 (第2 - 3 b層)
- 11 上部 10Y4/1 褐灰 シルト、下部 5Y5/1 灰 粗砂～細礫に2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック (5 mm程度) 混じる (第2 - 4層?)
- 12 2.5Y5/2 黒 粗砂～細礫混じりシルト 腐植を多く含む、土壌化 (暗色帯)、西端では擾乱により下層のブロックを含む (第3 a層)
- 13 10YR5/4～5Y6/1 にぶい、黄褐～灰 粗砂～細礫とシルト・シルト質細砂がブロック状に混じる、擾乱を受けた層 (第3 a層)
- 14 10YR5/6～2.5Y5/2 黄褐～暗灰黄 中砂～極粗砂混じりシルト 斑鉄が集積し黄色を呈する、擾乱を受ける (第4 - 1層)
- 15 2.5Y5/2～10YR5/6 暗灰黄～黄褐 シルト 均質 (第4 - 1層)
- 16 N3/0～N4/0 暗灰～灰 中砂～極粗砂混じり細砂質シルト 土壌化 (暗色帯) (第4 - 2 a層)
- 17 N5/0 灰 シルト質細砂 (第4 b層)
- 18 10Y6/1 灰 シルト質細砂/細～中砂 (48 (流路))
- 19 5Y6/1 灰 中～粗砂 極粗砂～細礫混じる (第3 b層)
- 20 7.5Y5/1 灰 粗砂～細礫 (106 (流路))
- 21 7.5Y6/1 灰 中砂～中礫混じり極細砂質シルト 擾乱を受ける、全体に斑鉄沈着 (第1 a層)
- 22 10YR4/6 褐 中砂～粗砂混じりシルト 擾乱を受ける (第2 - 1 a層)
- 23 5Y5/1 灰 中砂～細礫混じりシルト 擾乱を受ける (第2 - 1 a層)
- 24 5Y4/1 灰 中砂～細礫混じりシルト 擾乱を受ける、23よりも泥質 (第2 - 2 a層)
- 25 7.5Y5/1 灰 粗砂～細礫混じりシルト質細砂～中砂 擾乱を受ける (第2 - 3 a層)
- 26 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～細礫混じりシルト質中砂 擾乱、土壌化 (暗色帯) (第3 a層)
- 27 7.5YR5/8 明褐 粗砂～細礫混じりシルト 全体に斑鉄沈着 (第4 - 1層)
- 28 N3/0～N4/0 暗灰～灰 中砂～中礫混じりシルト 擾乱、土壌化 (暗色帯) (第4 - 2 a層)
- 29 5GY5/1 オリーブ灰 中砂～中礫 (第4 b層)
- 30 24・26・27のブロックが混じる 人為的に埋め戻した層 (12 [溝] 埋土)
- 31 5Y6/1～5Y6/2 灰～灰オリーブ 細砂～中礫 葉理あり、上方細粒化 (12 [溝] 埋土)
- 32 7.5Y6/1 灰 中砂～極粗砂に5B5/1 青灰 シルト質極細砂や24起源のブロック混じる (12 [溝] 埋土)
- 33 7.5Y6/1 灰 極粗砂～細礫と7.5Y6/1 灰 シルト質極細砂の互層 (12 [溝] 埋土)

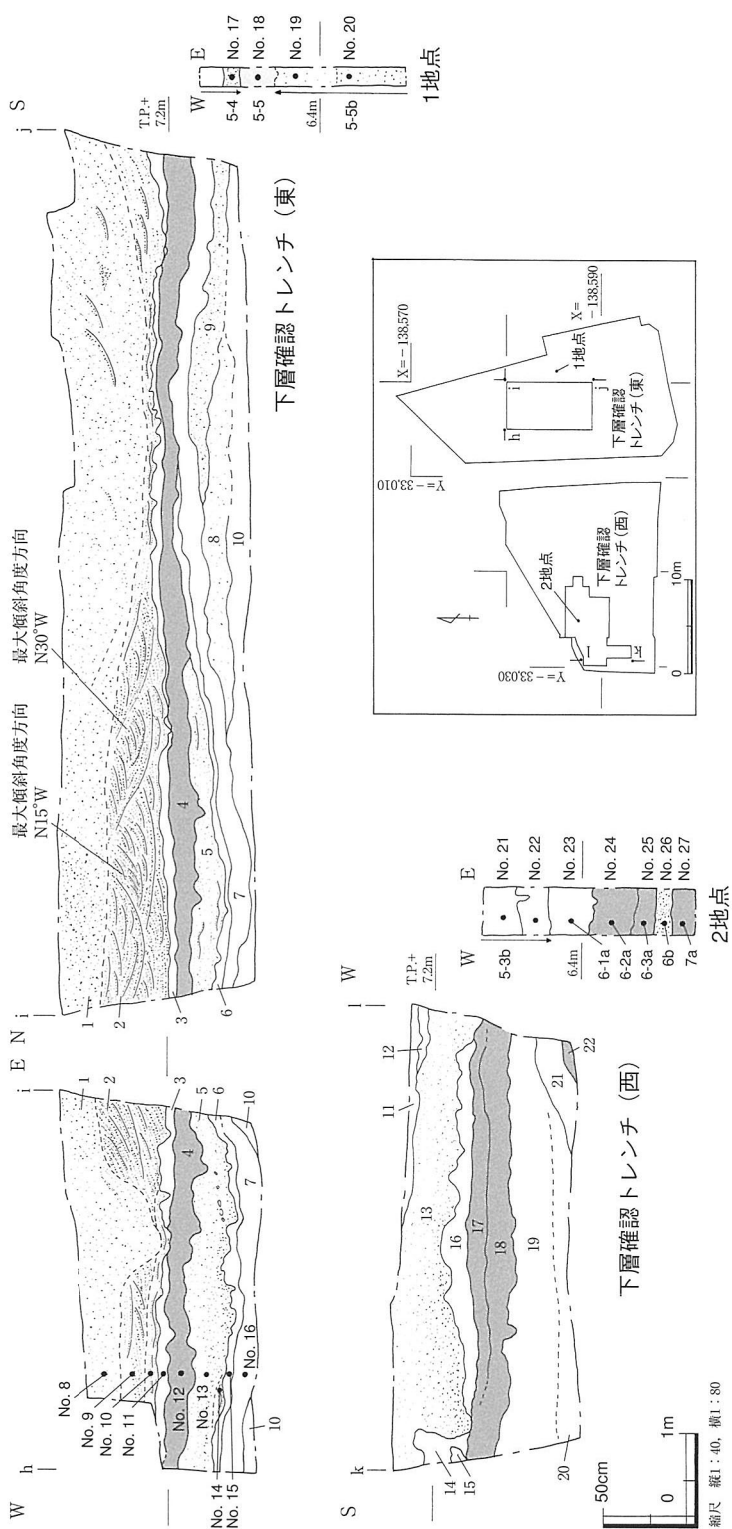


図6 下層確認トレンチ断面図

- 1 25Y5/2 暗灰黄 中砂～細礫 淘汰悪いが、部分的に斜交層理あり (第4 b層)
- 2 25Y7/4～5Y7/2 浅黄～灰白 中砂～細礫 トラフ型斜交層理あり (第4 b層)
- 3 5B5/1 青灰 中砂混じりシルト～粘土質シルト 中砂の葉層を挟在 (第5-1層)
- 4 N5/0 灰 中砂～細礫混じりシルト～粘土質シルト 土壌化 (暗色帯) (第5-2 a層)
- 5 7.5GY6/1～5BG6/1 緑灰～青灰 中砂～粗砂 弱い葉理あり (第5-3 b層)
- 6 5BG5/1 青灰 シルト 均質 (第5-4層)
- 7 10G4/1 暗緑灰 中砂～細礫混じりシルト 擾乱? (第5-4層)
- 8 10G5/1 緑灰 中砂～細礫混じりシルト質細砂～極細砂 擾乱? (第5-4層)
- 9 10G5/1 緑灰 粗砂～細礫混じり中砂 擾乱? (第5-4層)
- 10 5B5/1 青灰 中砂～中礫/シルト質細砂 湧水のため詳細不明 (第5-4層?)
- 11 N4/0 灰 中～粗砂混じりシルト 暗色帯 (古土壌) (第4-2 a層)
- 12 5BG6/1 青灰 中～粗砂混じりシルト IIの母材 (第4 b層)
- 13 10GY6/1～2.5GY6/1 緑灰～オリーブ灰 細礫～中・粗砂混じり細砂 上方細粒化 (第4 b層)
- 14 5Y6/2 灰オリーブ 中砂～細礫混じりシルト (第4 b層?)
- 15 N5/0 灰 中砂～細礫混じりシルト 均質 (第5-1層)
- 16 5Y6/2 灰オリーブ シルト/中砂～細礫混じりシルト 土壌化 (暗色帯) (第5-2 a層)
- 17 N6/0 灰 シルト/中砂～細礫混じりシルト 土壌化 (暗色帯) (第5-3 a層)
- 18 N5/0 灰 中砂混じりシルト 土壌化 (暗色帯) (第5-3 a層)
- 19 7.5GY5/1 緑灰 極細砂質シルト 中砂わずかに含む (第5-3 b層)
- 20 5BG6/1 青灰 極細砂質シルト～シルト 17よりも粒度が若干細かい (第5-3 b層)
- 21 5B4/1～N5/0 暗青灰～灰 粗砂～極細砂混じりシルト 擾乱 (第6-1 a層)
- 22 N3/0 暗灰色 中砂～細礫混じりシルト 擾乱、土壌化 (暗色帯) (第6-2 a層)

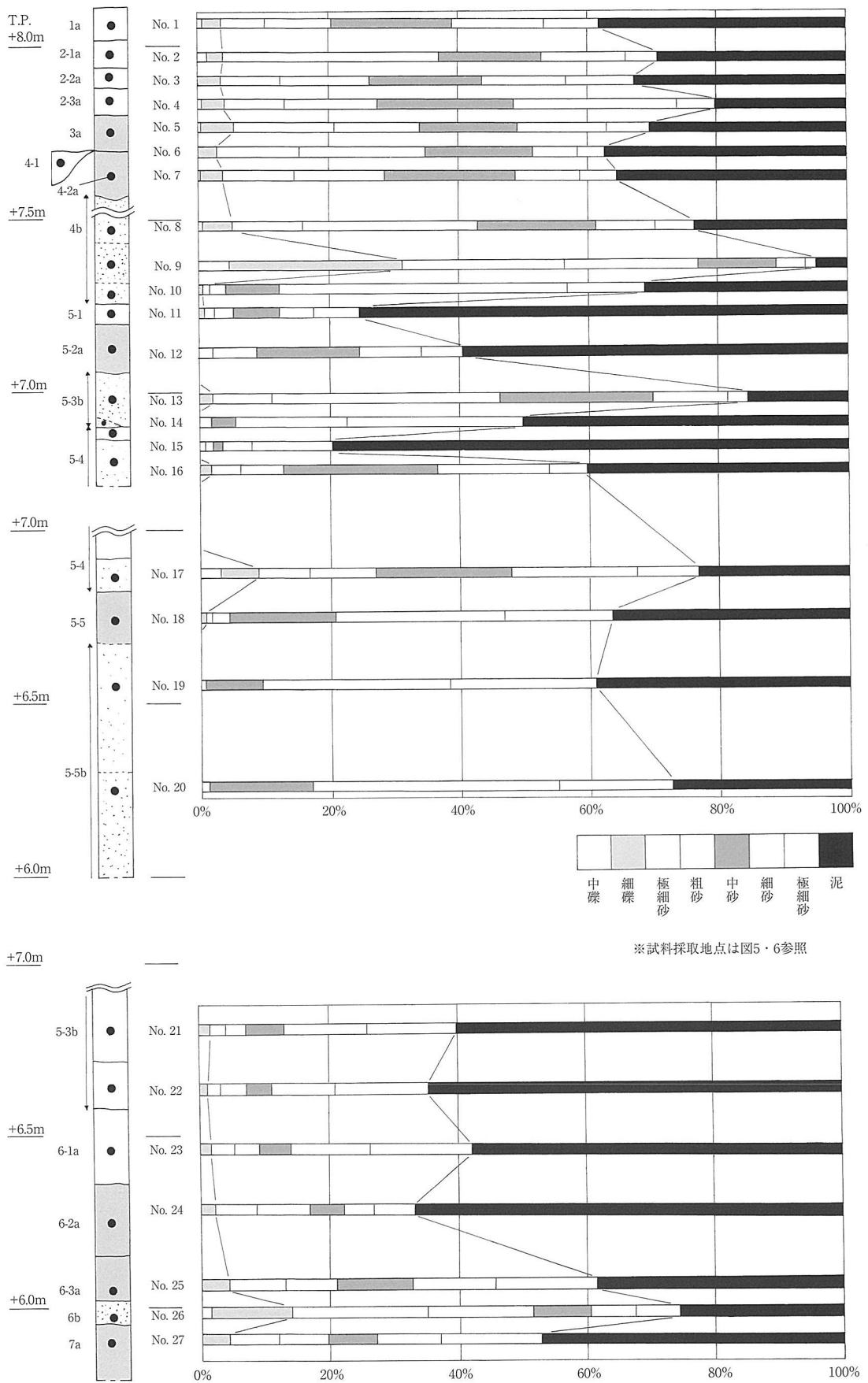


図7 粒度分析結果

った。周囲の讚良郡条里遺跡（その1）・（その3）の地層を若干検討したところ、第3 a層と第4 - 2 a層が分離できる部分は少なく、暗色帯が1枚しか確認できない場所が多かった。これについては、第3 a層が削られて第4 - 2 a層のみが残存している場合と、第3 a層と第4 - 2 a層が一体化して分層できなかった場合の両者があると考えられる。この点は、この地域の標準層序を組み立てる際に混乱の原因になる可能性が高く、層相だけでなく、遺構出土遺物の時期にも注目して整理する必要がある。

次に、下層確認トレンチで観察された層序を説明する。第4 b層は砂礫層である。讚良郡条里遺跡（その3）などでは流路堆積物の部分も存在するが、当調査区の範囲で確認されたものは氾濫堆積物と考えられる。特に調査区東側に厚く堆積しており、その部分の斜交層理の最大傾斜方向はN15° W、N30° W（磁北を基準にして計測）であった。この方向は古流向を示すとされており、この砂礫層が南東方向から供給されたことを示唆する。後述するように、この層の厚さの違いは微地形に大きな影響を与えている。

第5 - 2 a層は有機物を比較的多く含み、擾乱を受けたと考えられる古土壌である。調査区西側ではこの下に砂礫層を挟んでもう一枚古土壌が存在しており、第5 - 3 a層とした。なお、第4 b層と第5 - 2 a層の間には薄いシルト層が堆積しており、第5 - 1層とした。第5 - 3 a層の下を第5 - 3 b層と呼称したが、この層は東側のトレンチと西側のトレンチで層相が異なっていた。

東側のトレンチにおいては、第5 - 3 b層では砂層であった。また、その下にはシルト層が堆積しており、さらにその下には淘汰のよくない砂礫層が堆積していた。その下の堆積層を部分的に深掘して観察したところ、その下でも同様に上方細粒化した堆積単位が確認できたため、第5 - 3 b層の下のシルト層と砂礫層を合わせて第5 - 4層とし、その下についても上方細粒化する単位に合わせて第5 - 5層・第5 - 5 b層とした。粒度分析結果をみてわかるように（図7）、第5 - 5 b層から第4 - 2 a層にかけて、上方細粒化した堆積単位が累重するという状況が認められるが、以上のように層序番号をつけることで、こうした状況が説明しやすくなる。

一方、西側のトレンチでは、第5 - 3 a層の下に極細砂質シルトが堆積していた。この層が東側のトレンチにおける第5 - 3 b層と同時異相をなすと考えて、第5 - 3層と呼称した。また、その下には、擾乱を受けた砂混じりシルトである第6 - 1 a層、有機物を多く含む古土壌（暗色帯）である第6 - 2 a層、第6 - 3 a層の順に堆積していた。第6 - 3 a層の下には淘汰のよくない砂礫層（第6 b層）が堆積しており、その下には腐植を多く含んだ古土壌（第7 a層）が堆積していた。

両トレンチの層相の違いを解釈すれば、東側のトレンチが谷にあたっていた可能性が考えられる。そして、西側のトレンチでは古土壌が発達した状況が確認できたが、これらと谷の関係や谷の形成時期については明らかにできなかった。第5 - 3 a層からは縄文時代前期後葉の土器が出土しているため、第6 - 7層はそれ以前の堆積物であることは明らかである。この問題は更新世末期～完新世初期における堆積環境の変化と地形形成を考える上で重要であると考えられる。当調査区の調査終了後、周囲の調査区では下層確認トレンチで谷・流路を検出しており、その中には縄文時代前期後葉の土器が出土したものもある。この問題の検討は、これらの情報が整理されるのを待って、検討することにした。

前述したように、当調査区の周辺でも並行して調査がおこなわれたが、当調査区が最も早く調査を終了したこともあり、それらの情報については十分に把握できていない。今後はそうした情報も含めて、この地域における標準層序を確立することが必要である。

第4章 遺構・遺物

遺構については、遺構の種別に関わらず通し番号をつけ、番号の後に遺構の種別を括弧つきで表示した。調査では、近世以降の層と考えられる第1 a層までを重機で掘削し、第2 - 1 a層から人力掘削した。また、ほとんどの層準で古土壌・作土層上面は多少とも削られていたため、遺構検出作業は古土壌・作土層の下面（b面）を中心におこなった。

第2 - 1 a層・第2 - 1 b面

作土層である第2 - 1 a層からは、奈良時代～平安時代初頭頃の須恵器片、土師器片のほか、瓦器や瓦質土器の破片などが出土した。これらの遺物は耕作によって下層から巻き上げられたものと考えられるため、この層準の時期を推定するのは困難である。なお、図17 - (10)は、この層から出土した軒平瓦の破片である。奈良時代のものと思われ、近接する高宮廃寺との関連も考えられる。

第2 - 1 b面からは、耕作に関わると考えられる小溝を21条、土坑を1基検出した。溝は南北方向と東西方向にのびるものの両者があるが、前者が多数をしめる。なお、4・5・7（溝）は南西 - 北東方向にのびていたが、これは調査区の東を流れる用水路にほぼ平行している。これらの遺構からは遺物は出土しなかった。

第2 - 2 a層・第2 - 2 b面

作土層である第2 - 2 a層からは、奈良時代～平安時代初め頃のものと考えられる土師器片・須恵器片のほか、瓦器の破片なども出土した。これらについても、下層から巻き上げられたものがほとんどをしめると考えられ、この層が耕作された時期を遺物から推定することはできない。

第2 - 2 b面からは、溝が4条、土坑が6基、落ち込みが1基検出された。溝のうち、18・43は南北方向にのびるが、19は南東 - 北西方向にのびるものである。

この面で検出された遺構の中で特筆すべきものに、12（溝）がある。この溝は調査区東端において検出された。調査区東端に掘削した側溝が溝を縦断してしまったため、当初は埋土の状況を正確にとらえることができなかったが、その後、溝を横断する断面を2ヶ所で観察し、3時期の溝が切り合っていることが判明した。

図9上段左は図8のa - a'ラインの断面図であるが、図の2・3層が新段階の溝、4・5層が中段階の溝、6層が古段階の溝を埋積する堆積物である。古段階のものについては一部しか観察できていないが、上部まで葉理の認められる砂礫層で埋まっていた。また、中段階・新段階のものについては、下部が葉理の認められる砂礫層、上部はシルト・砂がブロック状に混じる堆積物で埋まっていた。こうした状況は図8のb - b'ラインにおいても認められた（図9上段右）。ここでは2時期のものしか検出されていないが、切り合い関係からみて、図の9・10層が新段階、11・12層が中段階に対応すると考えられる。そして、古段階のものは調査区外に位置する可能性が高い。これらの断面において確認された中・新段階の埋積状況は、砂礫によって溝が半ば埋まった後、人為的に埋められたことを示している。

12（溝）の帰属面については、新段階の埋土上層に第2 - 2 a層起源のシルトブロックが入っていた

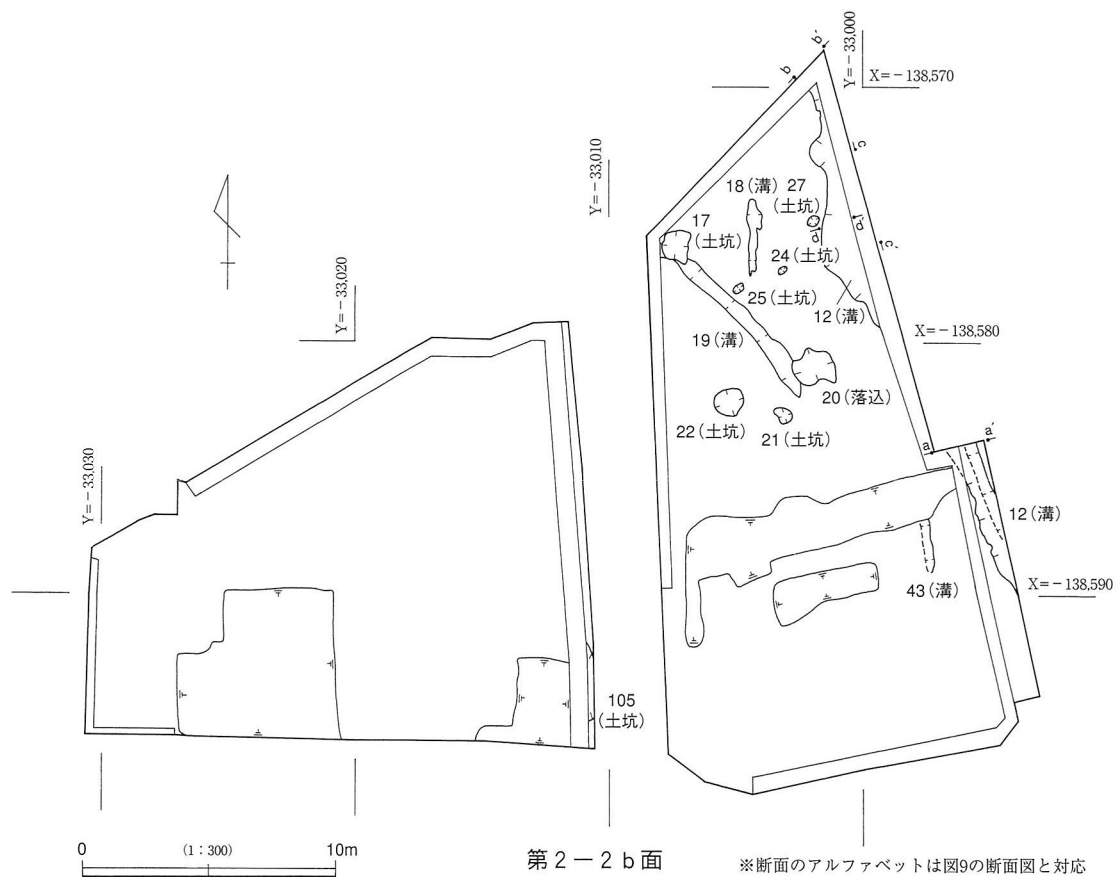
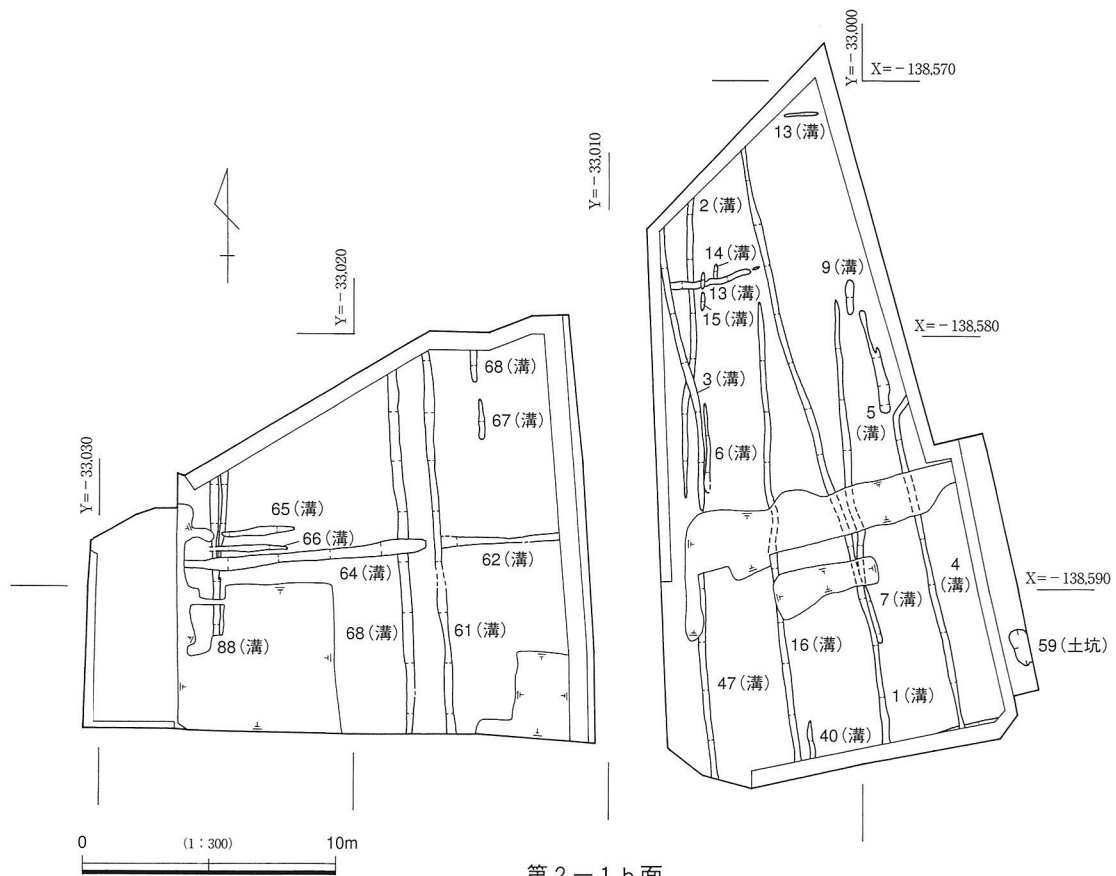
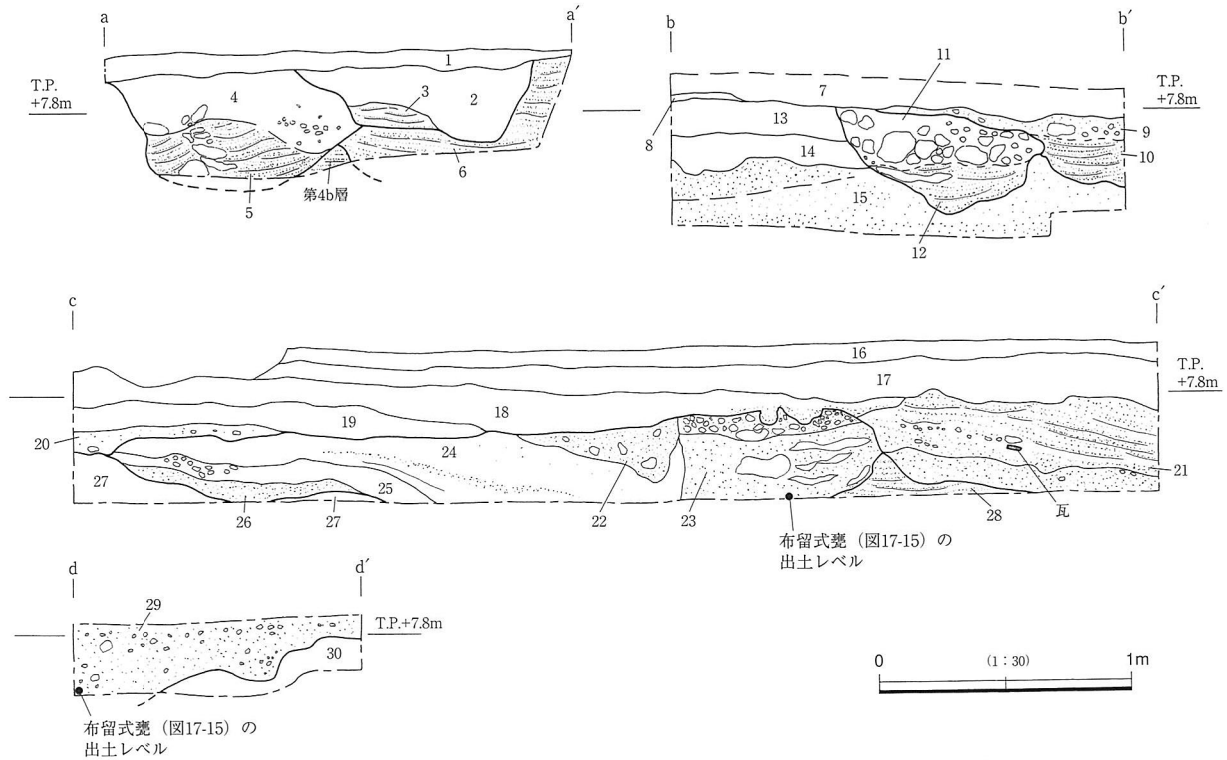


図 8 第 2 - 1 b 面・第 2 - 2 b 面平面図



- | | |
|--|---|
| <p>1 5Y4/1 灰 中砂～細礫混じりシルト (第2-1 a層)</p> <p>2 7.5Y5/1 灰 シルトのブロック (3～5mm程度多い) と細砂～粗砂が混じる (12 [溝] 新段階)</p> <p>3 5B6/1 青灰 細砂と5GY4/1 暗オリーブ灰 極細砂～シルトが平行葉理を形成 (12 [溝] 新段階)</p> <p>4 10Y5/1 灰 シルトのブロック (5mm程度多い) と細砂～細礫が混じる (12 [溝] 中段階)</p> <p>5 10YR6/6～7.5Y6/1 明黄褐～灰 中砂～粗砂と細礫～中礫が斜交層理を形成、10YR6/1～7.5Y4/1 灰 細砂～シルトのブロックが混じる (12 [溝] 中段階)</p> <p>6 10Y6/1～5B6/1 灰～青灰 細砂/粗砂～細礫/細砂～極細砂 葉理あり (12 [溝] 古段階)</p> <p>7 5Y4/1 灰 中砂～細礫混じりシルト (第2-2 a層)</p> <p>8 7.5Y5/1 灰 粗砂～細礫混じりシルト質細砂～中砂 シルトブロックが混じる (第2-3 a層)</p> <p>9 7.5Y6/1 灰 中砂～極粗砂に5B5/1 青灰 シルト質極細砂、第2-2 a層起源のブロックが混じる (12 [溝] 新段階埋土)</p> <p>10 7.5Y6/1 灰 極粗砂～細礫とシルト質極細砂の互層 (12 [溝] 新段階埋土)</p> <p>11 第2-2 a層、第3 a層、第4-2 a層起源のブロックが混じる (12 [溝] 中段階埋土)</p> <p>12 5Y6/1～6/2 灰～灰オリーブ 細砂～中礫 葉理あり、上方細粒化 (12 [溝] 中段階埋土)</p> <p>13 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～細礫混じりシルト質中砂 (第3 a層)</p> <p>14 N3/0～4/0 暗灰～灰 中砂～中礫混じりシルト (第4-2 a層)</p> | <p>15 5GY5/1 オリーブ灰 中砂～中礫 (第4 b層)</p> <p>16 5Y5/1 灰 粗砂～中礫混じりシルト (第2-1 a層)</p> <p>17 5Y5/1 灰 シルト質細砂～中砂 極粗砂～細礫が混じる (12 [溝] 埋土)</p> <p>18 5Y4/1 灰 シルトのブロックと中砂～中礫が混じる (12 [溝] 埋土)</p> <p>19 5Y4/1 灰 シルトのブロックと中砂～中礫が混じる、17よりも砂礫の量多い (12 [溝] 埋土)</p> <p>20 7.5Y6/1 灰 極粗砂～中礫に第3 a層のブロック混じる (12 [溝] 埋土)</p> <p>21 10GY4/1～N3/0 緑灰～暗灰 シルトのブロックと2.5Y6/3～10G6/1 にぶい黄～青灰 中砂～中礫が混じる、砂礫には葉理が認められる部分あり (12 [溝] 埋土)</p> <p>22 10Y4/1 灰 中砂混じりシルトのブロックと粗砂～細礫が混じる (58 [土坑] 埋土)</p> <p>23 上部 N3/0 暗灰 シルトのブロックが集中し、その間に中砂～細礫が入る 下部 7.5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～細礫を主体とし、N3/0 暗灰 細砂質シルト～シルトのブロックが混じる (58 [土坑] 埋土)</p> <p>24 10Y4/1～N4/0 灰 中砂混じりシルト～シルト (58 [土坑] 埋土)</p> <p>25 10Y4/1 灰 中砂混じりシルト 粗砂～細礫が若干混じる (58 [土坑] 埋土)</p> <p>26 10BG5/1 青灰 中砂～細礫 葉理なし (58 [土坑] 埋土)</p> <p>27 5GY6/1 オリーブ灰 極粗砂～細礫混じり極細砂質シルト (第4 b層)</p> <p>28 10G6/1 青灰 粗砂～細礫 (第4 b層)</p> <p>29 N3/0 灰 シルトを主体とし、シルト、粗砂～細礫、細砂質シルトのブロックが混じる、c-c'ラインの23下部に連続する (58 [土坑] 埋土)</p> <p>30 5BG5/1 青灰 粗砂～細礫 (第4 b層)</p> |
|--|---|

図9 12 (溝) 断面図

ため、第2-2 b面の遺構と判断した。また、中段階のものは第3 a層を切っているため、この層準よりも新しいものである。問題は古・中段階のものと第2-3 a層との関係であるが、溝の周辺では第2-3 a層が削られて遺存しなかったため、明らかにできなかった。

この溝の中には葉理の認められる砂礫が堆積していたため、水路として機能していた可能性が高い。また、図9の5層には斜交層理が認められたが、その最大傾斜方向はN20° W (磁北を基準にして計測)であった。この方向は古流向を示すものであり、水は南南東から北北西に向かって流れていたと考えられる。この溝は調査区の東を流れる現代水路に沿っているだけでなく、流向も共通しており、現代水路の前身となる水路であった可能性が高い。調査区東辺と現代水路は2m弱離れているため、調査区外に第1 b面に帰属する溝も存在する可能性がある。また、今回古段階とした溝より古い時期の溝が調査区外に存在する可能性も、全く否定することはできない。

12 (溝) からは比較的多くの土器が出土した。ただし、今回調査できたのは溝の西端部分のみで、側溝の影響で切り合い関係が平面的に認識できなかった。そのため、出土遺物は中段階から出土したものが大半で、一部新段階のものが混じっている可能性がある。そのうち図化できたものを図17-(1~5)に示した。それらの多くは奈良時代~平安時代初め頃のものである。(1)は須恵器杯、(2~4)は須恵器壺の破片である。これらの他に古墳時代中期前半の甕の破片なども出土した。ただし、(5)は篠窯産須恵器鉢の口縁部細片であり、10世紀代のものである。また、後述するように、12 (溝) 新段階よりも層位的に古い第2-3 b面83 (溝) からは、12世紀後半代の瓦器椀が出土した。したがって、12 (溝) から出土した遺物は遺構の時期を示さないと思われる。少なくとも、今回の調査区内で確認された溝については、中世のものであろう。

第2-3 b面

作土層と考えられる第2-3 a層からは、須恵器・土師器・瓦器などの破片が少量出土したのみであり、その耕作時期は不明である。

第2-3 b面からは、調査区西半を中心に溝が検出された。西半では南北方向の溝が密集して存在していた (図10、写真図版3-10)。ただし、1つの溝でも、掘り進めるうちに2つの溝が接しているような状況になったものもあった。平行する溝が密集する状況や、埋土が第2-3 a層であること、さらに掘削具の痕跡の可能性もある細長いくぼみが底面に連続して存在する (写真図版3-11) ことからみて、これらの溝は第2-3 a層の耕作に伴う耕作痕と考えられる。特に、これらの溝は畝作土下面で検

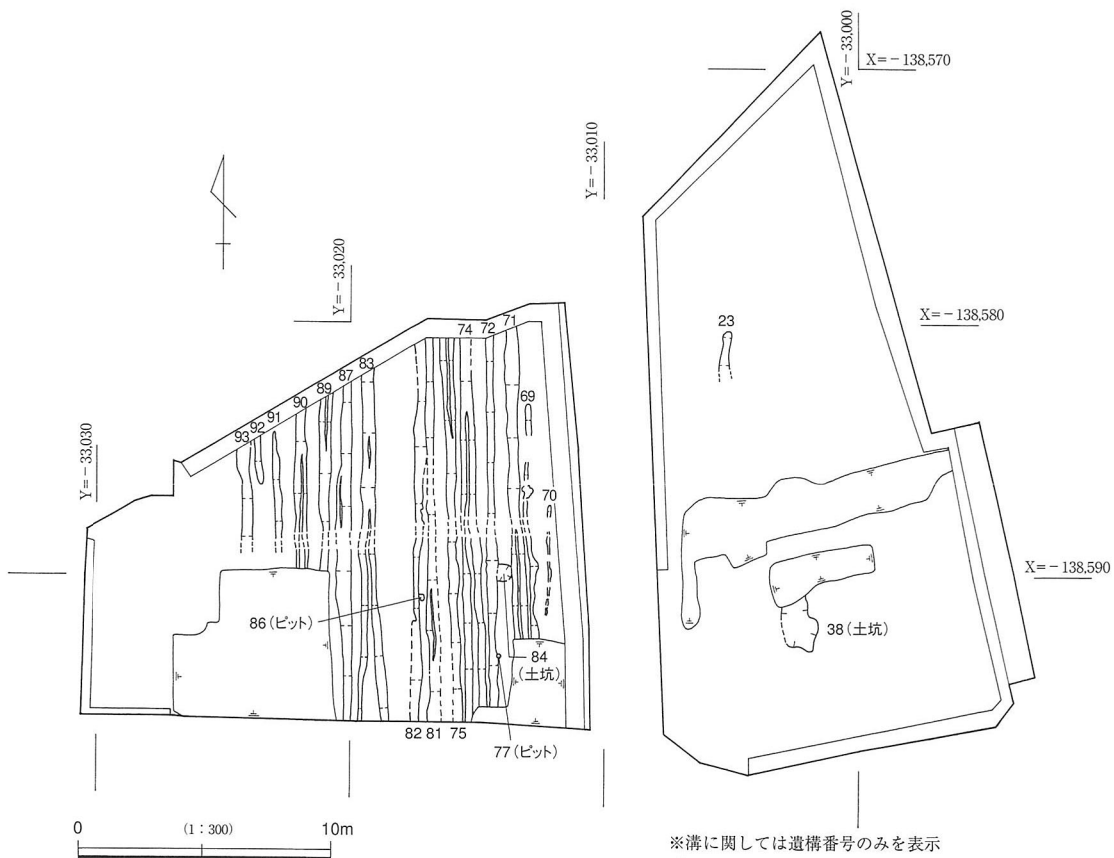


図10 第2-3 b面平面図

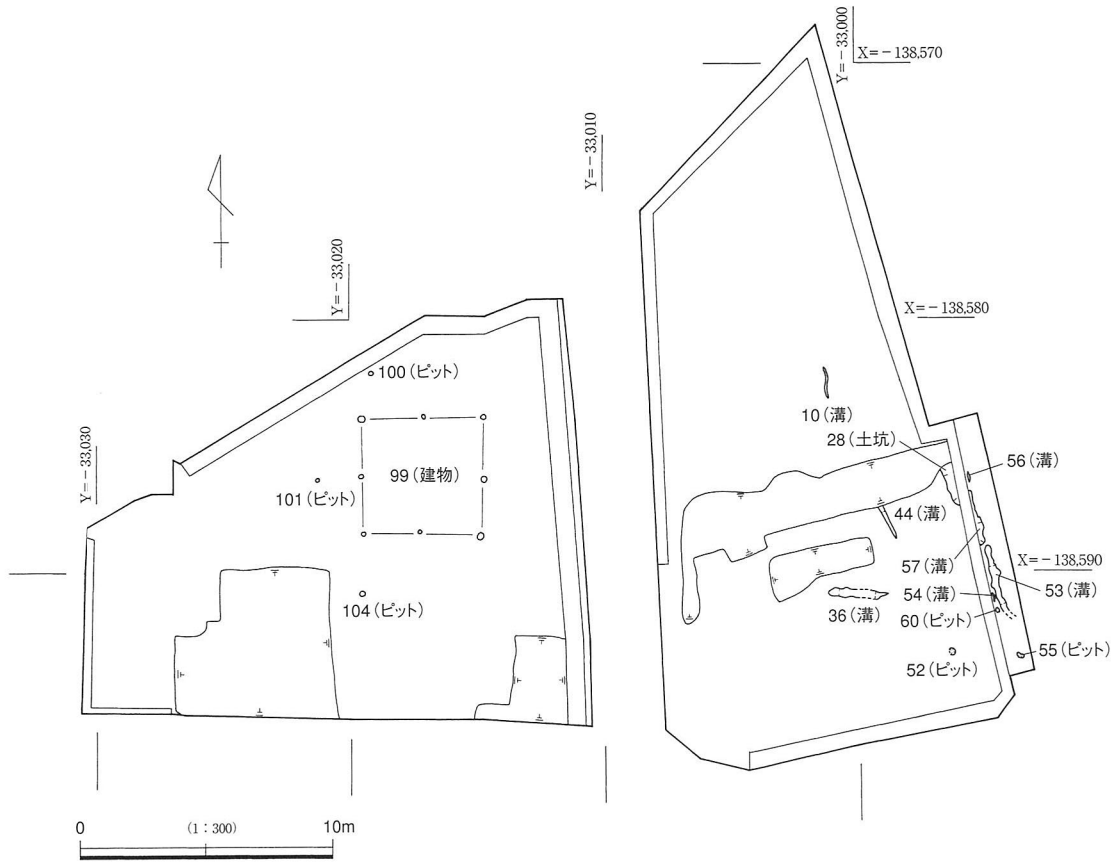


図11 第2-3b面(古)平面図

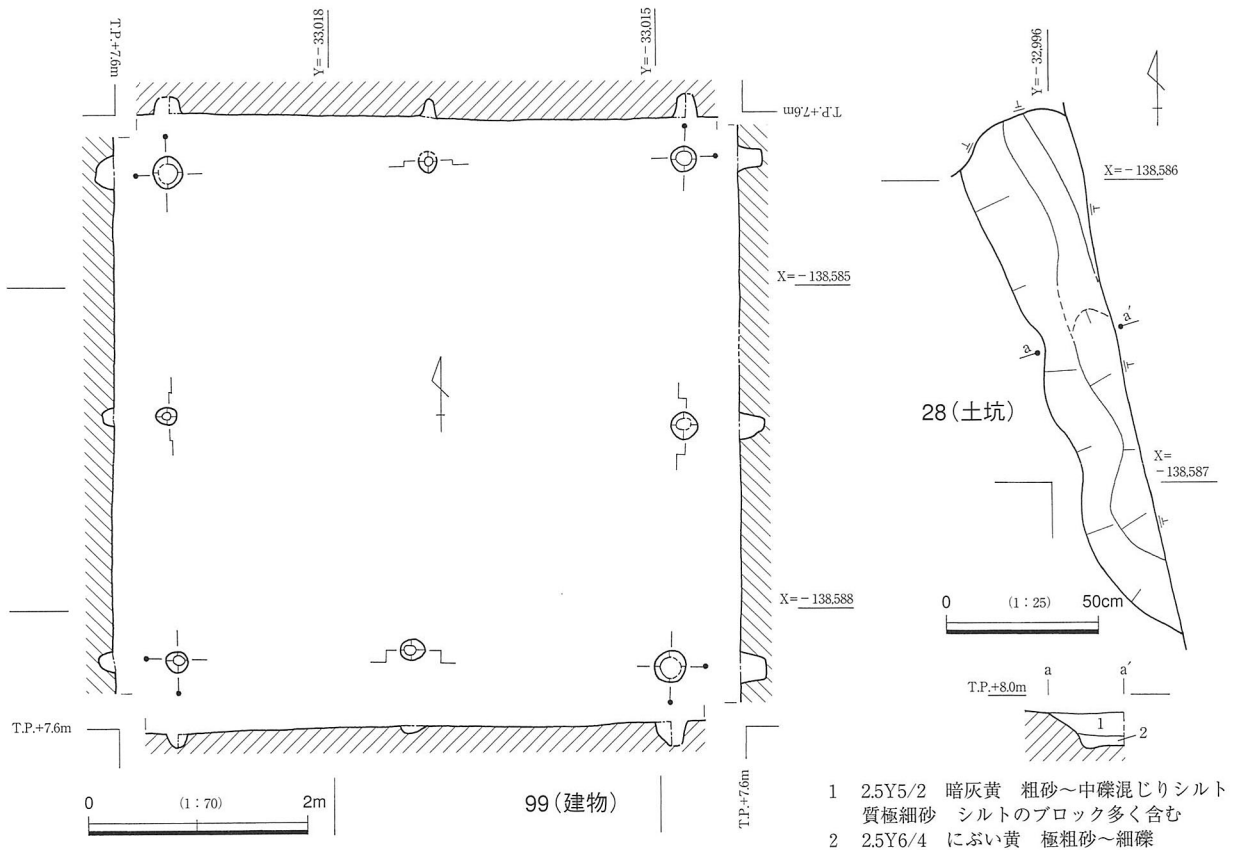


図12 第2-3b面(古)遺構図

出される耕作痕に類似しており、第2-3 a面で畠が営まれた可能性を示唆する。なお、これらの溝のうち、83(溝)からは瓦器碗の底部(図17-6)が出土した(写真図版3-12)。12世紀後半代のものと思われる。

なお、調査区東半において第2-3 a層起源の土で埋没していた遺構として、23(溝)・38(土坑)があげられる。いずれも浅い遺構である。調査区東半で遺構が少なかったのは、第2-3 a層の遺存状況が悪かったことにも関係するが、西半で検出されたものは深いものも多く、同様なものが東半にあったとすれば遺存すると思われる。したがって、少なくとも西半で検出された耕作痕は、東半にはもともと存在していなかった可能性が高い。

第2-3 b面(古)

以上説明した第2-3 b面の遺構は、埋土に第2-3 a層起源の土を含むものであり、第2-3 a層の耕作に関わると考えられるものであった。第2-3 b面ではそれ以外に、砂礫を主体とする埋土の遺構も検出された。これらは耕作によって第2-3 a層が形成される以前の遺構であり、第2-3 b層堆積後、比較的早い時期に属する可能性が高いため、特に第2-3 b面(古)の遺構として抽出した。

第2-3 b面(古)の遺構は、調査区南東隅を中心に検出された。それらの多くは浅い溝やピットであった。53・56・57(溝)は南東-北西方向にのびる溝であるが、きわめて浅いうえに底面の凹凸が激しく、小穴が連なるような状況を呈していた。また、28(土坑)は細長い土坑であるが、側溝で東側が切られ、北側も攪乱により破壊されていた(図12右)。その埋土からは、土器細片とともに石製腰帯具(巡方)が出土した(図17-9)。その大きさは縦3.1cm、横3.5cm、厚さ0.8cmを測る。表面および側面は研磨されて平滑になっているが、裏面は研磨されておらず、擦痕が顕著に残っている。なお、石材は頁岩ないし千枚岩である(石材鑑定は富田克敏〔近畿大学〕による)。

また、調査区西半からは99(建物)が検出された(図12左)。その柱穴は第2-3 b面の耕作痕に切られており、耕作痕を完掘した段階で検出された。2×2間の掘立柱建物である。西辺3つと東辺3つの柱穴は深く、南辺・北辺中央のものは浅い。主軸はほぼ南北方向である。なお、その柱穴のひとつからは8世紀後半～9世紀頃のものと考えられる須恵器杯の細片(図17-8)が出土した。

99(建物)の周囲からは101・104(ピット)が検出された。前者は建物西辺中央の柱穴の西に位置し、後者は西辺南側の柱穴の南に位置する。これらについては建物に関連する可能性もあるが、断定はできない。

第3 a層・第3 b面

暗色帯を構成する古土壌である第3 a層からは遺物はほとんど出土しなかった。第3 a層を除去した面が第3 b面であり、この面で遺構を検出した。ただし、調査区東部では第3 b層が残存せず、第3 a層と第4-2 a層が接している部分が多かった。さらに、調査区南東部では第3 a層が削られてほとんど残存していかなかった。これらの場所では第4-2 a層の上面を精査することで、この時期の遺構を検出した。

第1 a・2 a層では、耕作による削剥によって各時期の微地形を示すような起伏は認められなかったが、第3 b面では第3 b層の流路堆積物を中心にした起伏が比較的明瞭に認識できた。第3 a面の遺存状況は必ずしもよくないが、母材となる堆積物の起伏はその上面に形成される土壌上面の起伏に影響を

与えると思われる。そこで、第3 b面については等高線図を作成し、その起伏を表現した(図13)。等高線図は、現地において5 mメッシュで測定したレベルをもとにして作成した。等高線の間隔は5 cmとし、それを復原する際には、接する2点間の遺構面が直線的であったと仮定して、両者のレベル差を2点間の距離に合わせて比例配分することで等高線の値にあたる地点を求めた。それを見ると、後述する第4-1面48(流路)の流路堆積物が盛り上がり、堆積していた部分は南東-北西方向に高くなっており、その部分を中心に南西方向と北東方向に向かって傾斜することがわかる。これは現地での観察所見と一致する。また、調査区東端には南東-北西方向に等高線が張り出す部分がある。等高線の張り出しの南側については、第3 a層が残存しなかったため等高線を復原しなかったが、第4 b層の堆積によって生じた高まりが存在しており、第3 b面もこの高まりの影響で高くなっていたと思われる。なお、等高線図では表現できなかったが、調査区南西隅も第4-2 a面~第4-1面52(流路)の流路堆積物の影響で高くなっていたと思われる(図16上段の断面図参照)。さらに、調査区北西部では第3 b面が西に向かって下がっていく状況も認められた。この部分の第3 a層の厚さは他の部分と比べて厚いのが特徴である(写真図版4-14)。そして、下部には第3 b層や第4-1層のブロックが多く含まれていたが、上部ではそのようなブロックは認められなかった。この部分に関しては人為的に擾乱された可能性が高いが、人為的行為と土壌化の進行過程の関係については明らかでない部分も多く、今後さらに検討する必要がある。

第3 b面においては、土坑9基、溝3条を検出した。土坑のうち、遺物が出土したものには、29・37・58がある。

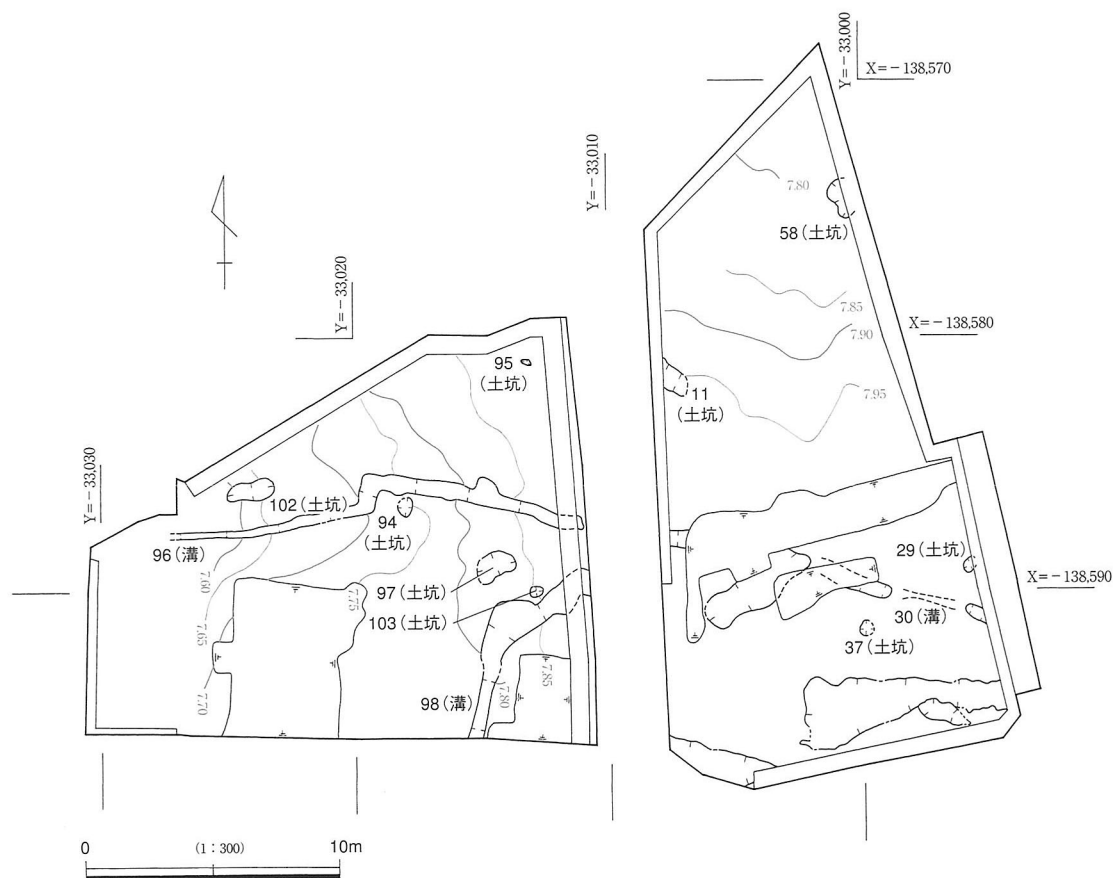


図13 第3 b面平面図

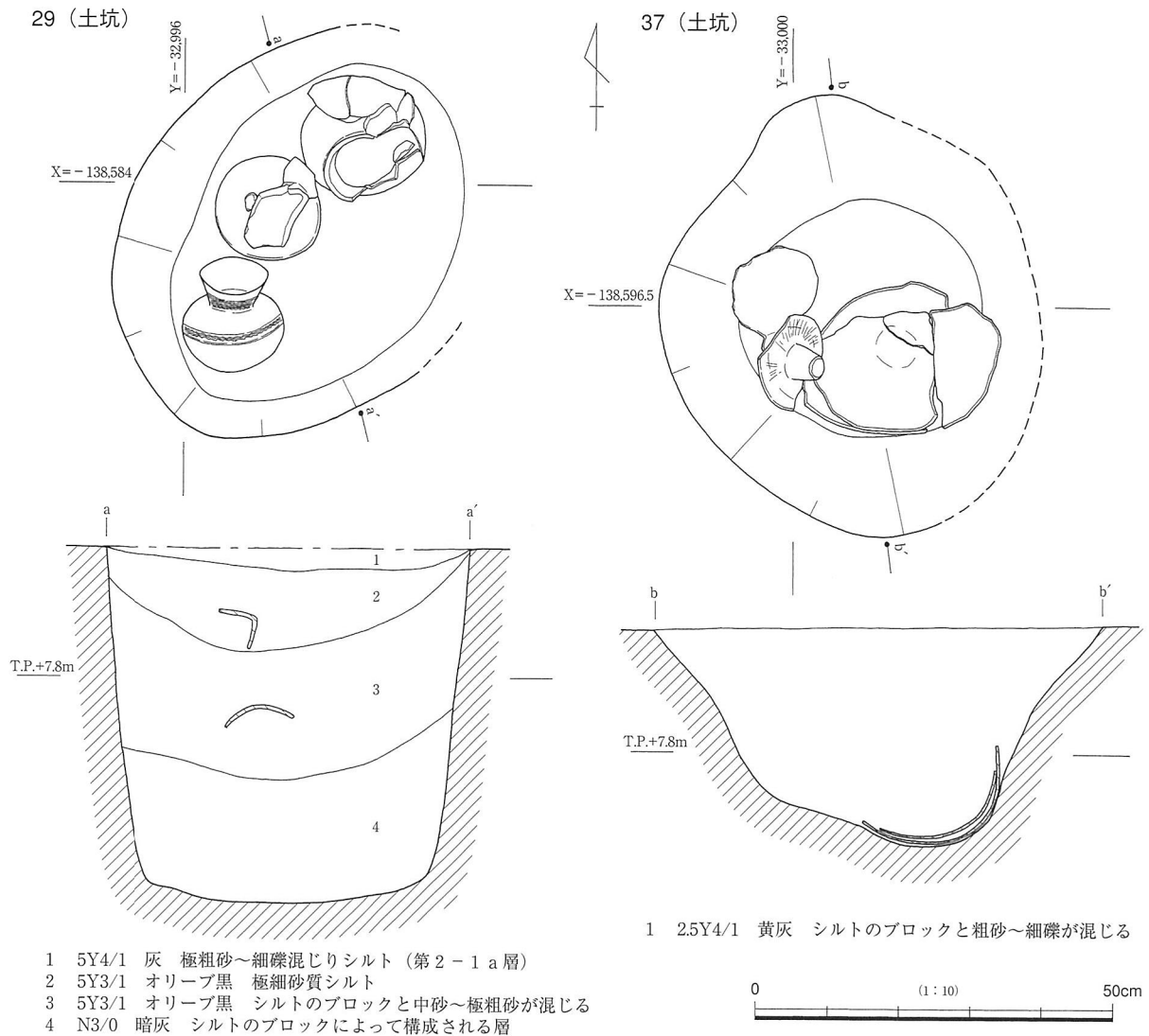


図14 第3 b面遺構図

29 (土坑) は長径1 m弱、深さ0.5mを測るもので、須恵器壺・土師器甕・高杯2個体分が出土した (図14左)。土器は図14の2層下部から3層上部に存在していた。この土坑から出土した土器は、図17- (11~14) に示した。(11) は須恵器壺で、頸部と肩部に波状文が施されている。また、底部外面の調整は静止ヘラケズリである。(12) は椀形高杯の杯部である。外面は摩滅が著しく、一部でハケメが観察されるにすぎないが、内面にはハケメの後にヘラミガキを施した状況が観察できる。(13) は高杯脚部である。(14) は布留式甕であるが、形態からみて布留式甕の中でも新しい時期に属するものと思われる。

37 (土坑) は長径0.7m、深さ0.3mを測るもので、底面から土師器甕・高杯が出土した (図14右)。この土坑から出土した土器は、図17- (16・17) に示した。(16) は高杯脚部である。また、(17) は布留式甕であるが、長胴化が進んでおり、新しい段階のものと考えられる。

また、58 (土坑) は12 (溝) に切られていた。当初、その埋土と12 (溝) の堆積物が区別できなかったが、12 (溝) 掘削中に土師器甕が出土し (写真図版4-16)、土器出土層準を検討する過程で別の土坑と認識できたものである (図9中段・下段)。この土坑から出土したのは布留式甕 (図17-15) である。

その他、第3 b面の遺構で注目すべきものに30・96・98 (溝) がある。いずれも深さが0.5m近いも

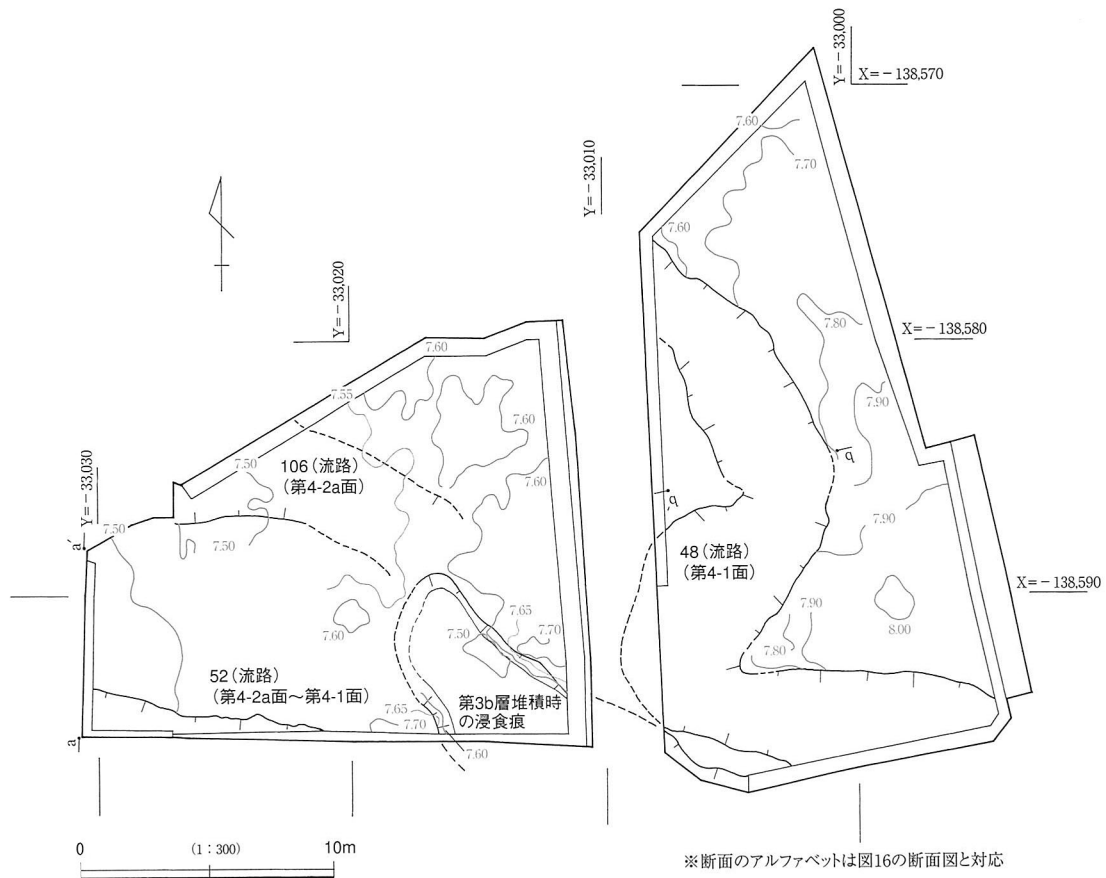


図15 第4-1面～第4-2a面平面図

のである。30と96は同一の溝のようにも思えるが、調査区西側東端で96が収束する状況を確認したことから、一応別の溝と判断した。

なお、調査区東側南端では、第3a層が入る浅い落ち込みを検出した。これは、後述する第4-1面48(流路)が砂礫で埋没した後、流路の痕跡として残存した凹地を反映していると思われる。この落ち込み周辺では第3a層は残存していなかったが、この落ち込みの中に第3a層が入り込んでいたことは、その周囲にも本来第3a層が安定して存在したことを示唆する。

第4-1面・第4-2a層

第3b層の砂礫層を除去した面が第4-1層上面(第4-1面)である。この面では流路を検出した。また、断面観察によって、流路が第4-2a面にも存在していたことが判明した。

まず、第4-1面の微地形について説明する。第4-1面の等高線(図15)は航空測量図をもとにしている。これによると、調査区東端に南南東-北北西方向の高まりが認められる。これは第4b層の砂礫が盛り上がり形成された微高地であり、第3b面の等高線でもその痕跡が認められたことから、第3a面段階までは残存していたと思われる。また、調査区西半は比較的平坦であるが、部分的に第3b層堆積時の侵食によって形成された凹地も存在していた。

次に、流路の変遷について述べる。第4-2a面では、52(流路)と106(流路)が存在していた。このうち、後者については面的な調査をおこなわなかったため、南東側の輪郭が不明瞭であるが、第4-1面48(流路)と位置的に重なる可能性もある。西側の下層確認トレンチでは、この流路の肩部の

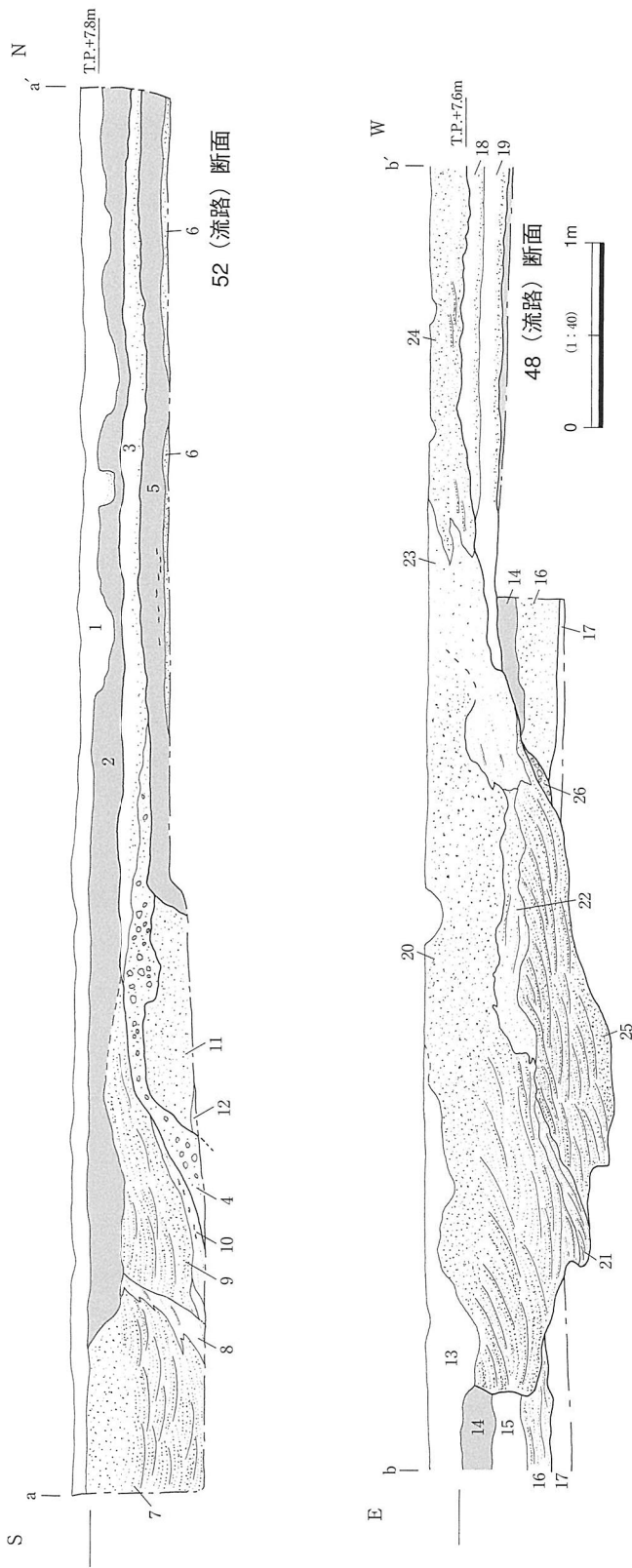


図16 48・52 (流路) 断面図

52 (流路)

- 1 5B5/1~5B4/1 青灰~暗青灰 中砂~細礫混じり極細砂質シルト 擾乱、下部に雲状斑鉄が集積する部分あり (第1 a層)
- 2 10G4/1~N4/0 暗緑灰~灰 粗砂~中礫混じりシルト質極細砂~細砂 擾乱、土壌化 (暗色帯) (第3 a層)
- 3 5B6/1 暗青灰 中~粗砂混じりシルト 下部に中~粗砂が挟在、上部に雲状斑鉄の集積部分あり (第4-1層)
- 4 25Y4/1 黄灰 シルトブロック (5mm以下) と中砂~細礫混じる (人為的擾乱を受けたものの可能性あり) (第4-1層)
- 5 25Y4/1 黄灰 中砂~細礫混じりシルト 擾乱受ける、土壌化 (暗色帯) (第4-2 a層)
- 6 7.5GY6/1 緑灰色 中砂~細礫 (第4 b層)
- 7 10YR5/6~5Y6/1 黄褐色 中砂~細礫 上部は淘汰悪い、下部にはトラフ型斜交層理あり
- 8 5GY6/1 オリーブ灰 細砂 粗砂~極粗砂を挟在
- 9 10YR5/6~5Y6/1 黄褐色 粗砂~中礫 トラフ型斜交層理あり
- 10 N4/0 灰 シルト 極細砂、有機物を帯状に挟在
- 11 7.5GY6/1 緑灰 粗砂~細礫 淘汰悪い、砂礫の粒子の間にシルトが入っている
- 12 2.5Y6/1 オリーブ灰 シルト~粘土質シルト

48 (流路)

- 13 2.5Y5/1 黄灰 極粗砂~細礫混じりシルト質極細砂~細砂 土壌化 (第2-2 a層)
- 14 N5/0 灰 粗砂~極粗砂混じり細砂質シルト 土壌化 (暗色帯) (第4-2 a層)
- 15 7.5GY6/1 緑灰 粗砂混じり細砂質シルト 14の母材のひとつ (第4 b層)
- 16 7.5GY6/1 緑灰 極細砂~中礫 平行葉理あり、上方粗粒化 (第4 b層)
- 17 5B6/1 暗青灰 シルト~粘土質シルト 均質 (第5-1層)
- 18 10YR5/6 黄褐色 中砂~極粗砂混じりシルト 下部に中砂~極粗砂が多く混じる (第4-1層 上部)
- 19 10Y5/1~10YR5/6 灰~黄褐 中砂~極粗砂混じりシルト 下部に中砂~極粗砂が多く混じる (第4-1層 下部)
- 20 2.5Y5/4 黄褐 中砂~中礫 上部は淘汰悪い、下部にはトラフ型斜交層理あり
- 21 7.5Y7/1 灰白 極細砂~細砂 斜交層理あり
- 22 2.5GY6/1 オリーブ灰 中砂~細砂 葉理あり
- 23 2.5GY6/1 オリーブ灰 極細砂~細砂 葉理不明瞭
- 24 2.5Y5/4 黄褐 粗砂~中礫混じり細砂~中砂 葉理不明瞭
- 25 7.5GY6/1 緑灰 中砂~中礫 トラフ型斜交層理あり
- 26 16と17がブロック状に混じる 人為的な加工に伴って形成された可能性あり

様子が観察でき、古土壌（暗色帯）である第4-2 a層が肩に沿って形成されている状況を確認した（図20中段、写真図版5-20）。これは流路の肩部に植生が発達したことを示しており、この流路には通常ほとんど水が流れていなかったと推定される。そして、この流路は砂礫で埋没するが、それは流路部分にのみ存在していた。この砂礫の堆積後、106の東側に48（流路）が形成された。この流路は、調査区南東部では東南東から北北西方向に流れるが、その後大きく蛇行し、北へ向きを変えることが判明した。図16下段は、48（流路）の断面である。流路堆積物については、古い段階の25層はトラフ型斜交層理が認められるが、それを切って堆積した20層では、下部にはトラフ型斜交層理が認められたものの、上部は淘汰の悪い砂礫層であった。また、23・24層は25層と同時異相をなす堆積物である。なお、26層は下層起源の砂やシルトがブロック状に混じる堆積物であり、人為的な加工に伴って形成された可能性もある。この流路肩部では直線的な部分も少なからず認められた。この中には、図16東側部分のように、

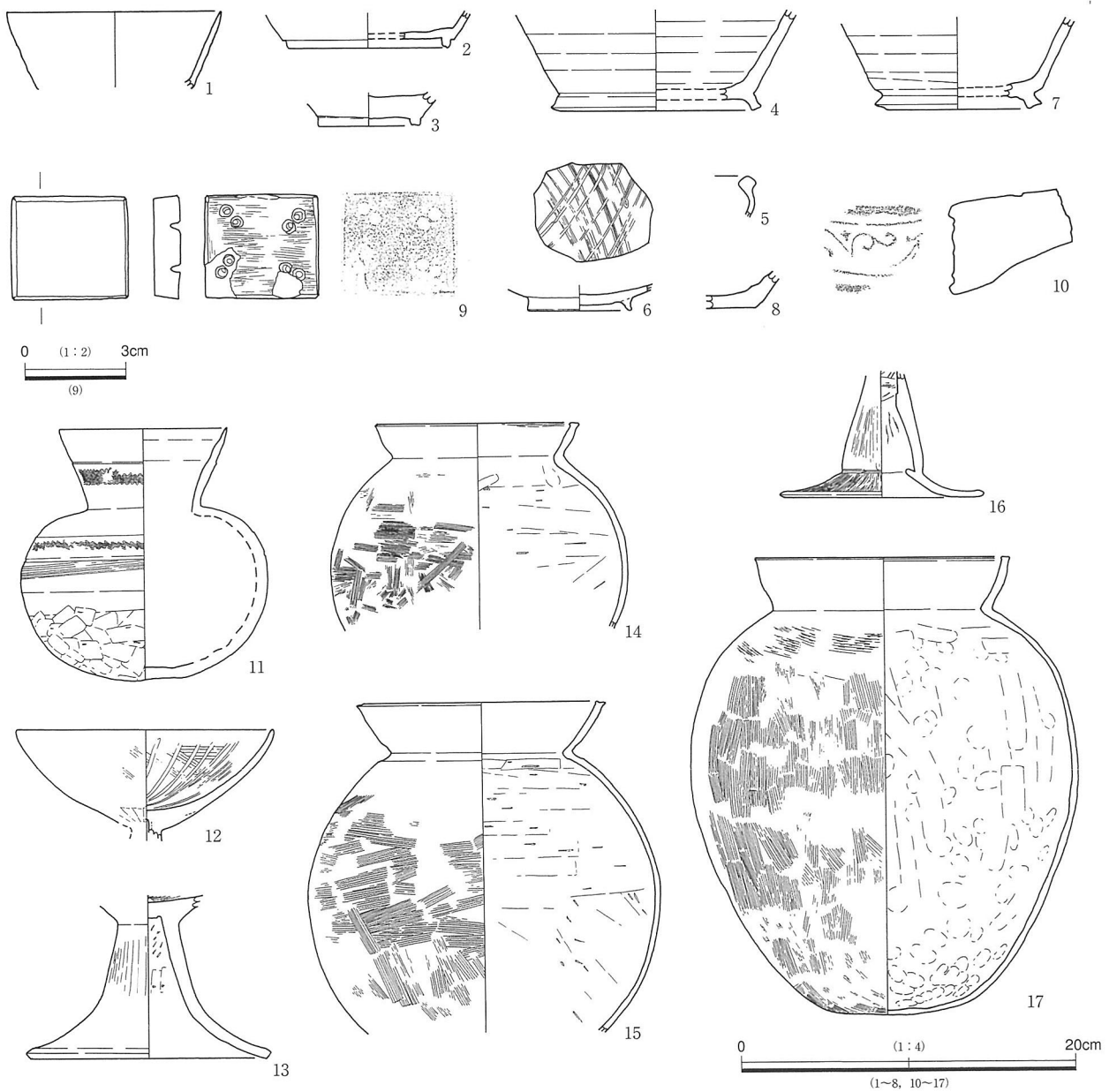


図17 第2-1 a層～第3 b面出土遺物

攻撃斜面で水流によって削られたと思われる部分もあるが、滑走斜面側にも肩が直線的な部分もあり、26層との関連が注目される。また、52（流路）は第4-1面にも存続した。図16上段は52（流路）の断面である。それをみると、第4-2 a 面段階の肩が淘汰の悪い砂礫で埋没した後、肩部に砂とシルトが混じる堆積物が形成されたことが判明した（図16の4層）。これについては人為的に擾乱を受けたものである可能性が高い。この層は周囲の第4-1層の下に堆積しており、その境には砂が堆積していた。

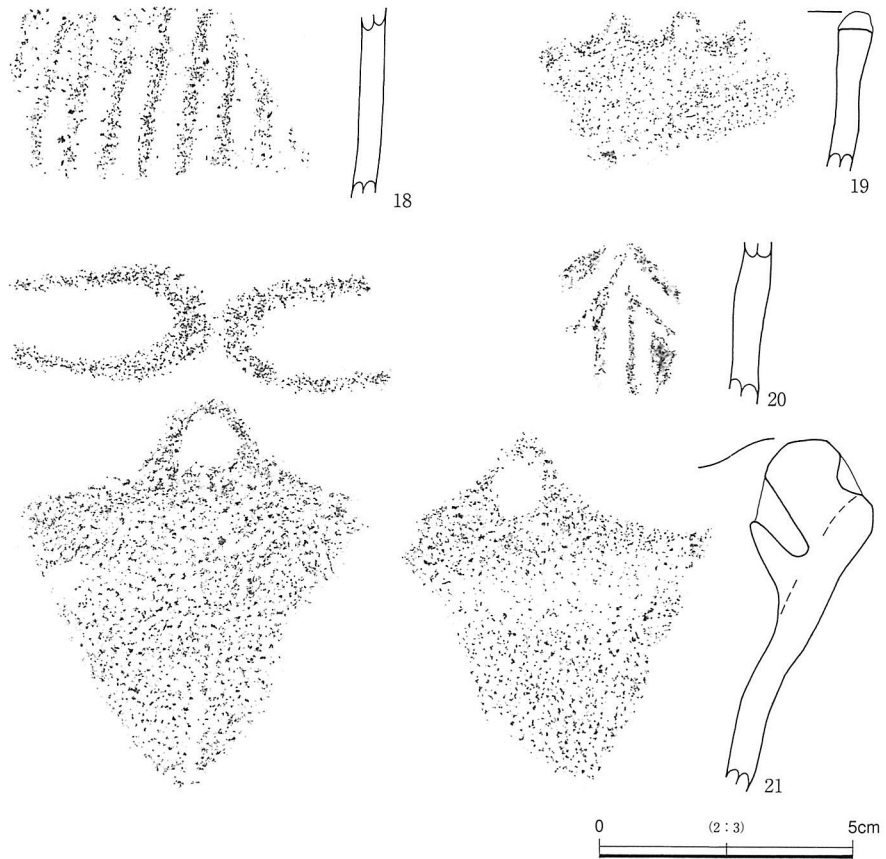


図18 48（流路）出土遺物

こうした関係に注目し、この層については第4-1層下部と呼称する。

これらの流路のうち、48については埋積する砂礫を掘削した。その結果、図18に示した縄文土器が出土したが、いずれも摩滅が激しく、水流によって砂礫とともに流されてきたと考えられる。(18)の外表面には撚糸文が施されている。(19)は口縁部の破片であり、端部に刻目が施されている。(20)には沈線文が施されているが、細片のため文様の全体像は不明である。(21)は波状口縁の破片である。時期については判然としないが、(18)が中期、(19)が晩期、(21)が後期前葉に属すると思われる。なお、小路遺跡（その2）でも第4-1面・第4-2 a 面に対比される流路が検出されているが、第4-1面段階の流路堆積物からは庄内式期に属すると考えられる土器が出土している。したがって、48出土の縄文土器は流路の時期を示すものではないと考えられる。

周辺調査区の成果から、第4-1面は庄内式期に年代の1点を有する可能性が高い。この段階の流路の肩が人為的に加工された可能性が考えられる点については、その時期に何らかの土地利用がなされたことを示唆しており、周辺調査区の成果と合わせて検討すべき課題である。

第5層

下層確認トレンチでは、第5-1～5-3 a 層および第5-4層から遺物が出土した。前者は西側のトレンチで、後者は東側のトレンチから出土した。

まず、西側のトレンチについて説明したい（図19）。当初、調査区西端に幅1 m、長さ5 mのトレンチを設定して掘削したところ、サヌカイトの石器・剥片が出土した。その出土層準は土壌化していたため、現地性の高い石器製作・使用の痕跡が残存している可能性が考えられた。そこで、トレンチを拡張

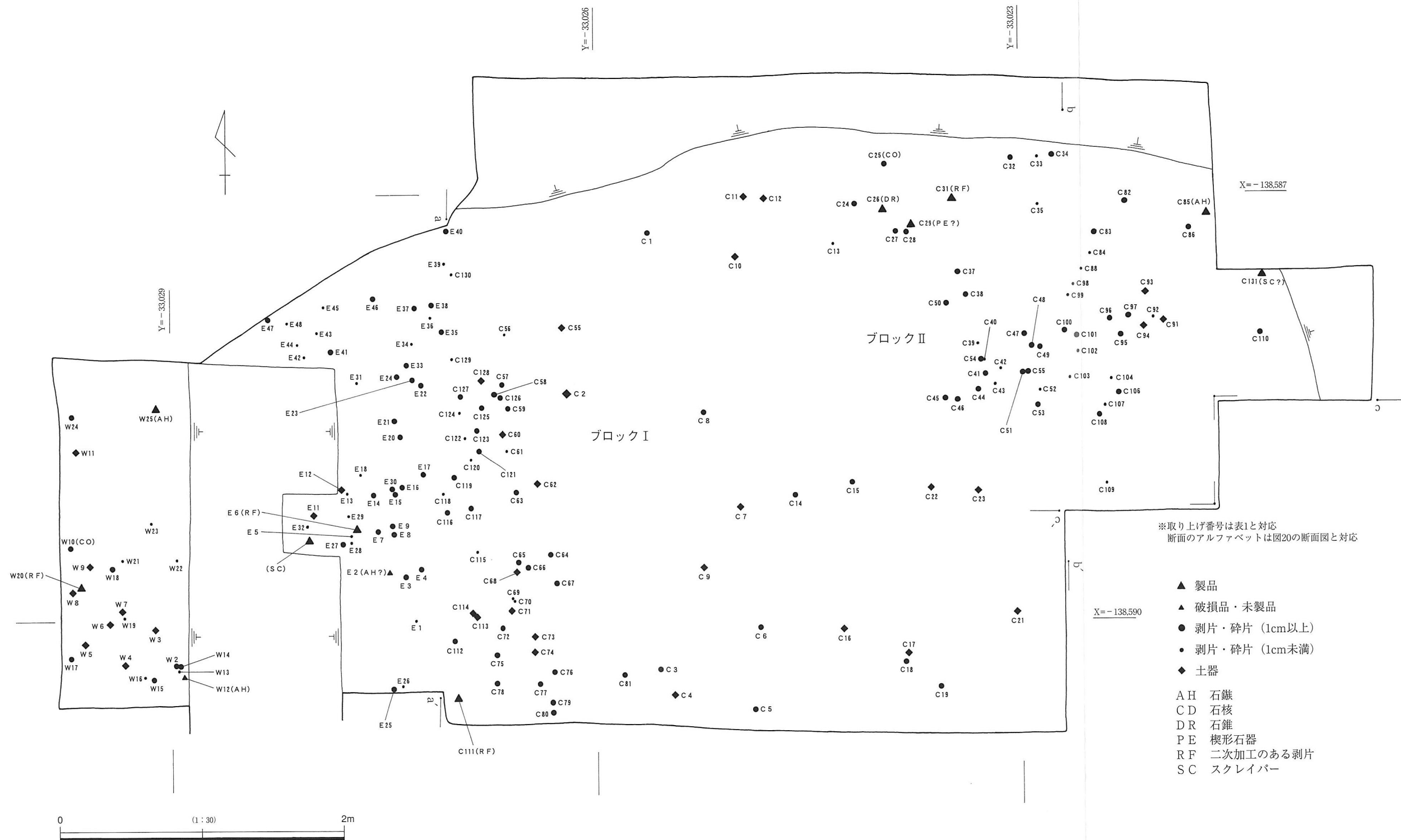
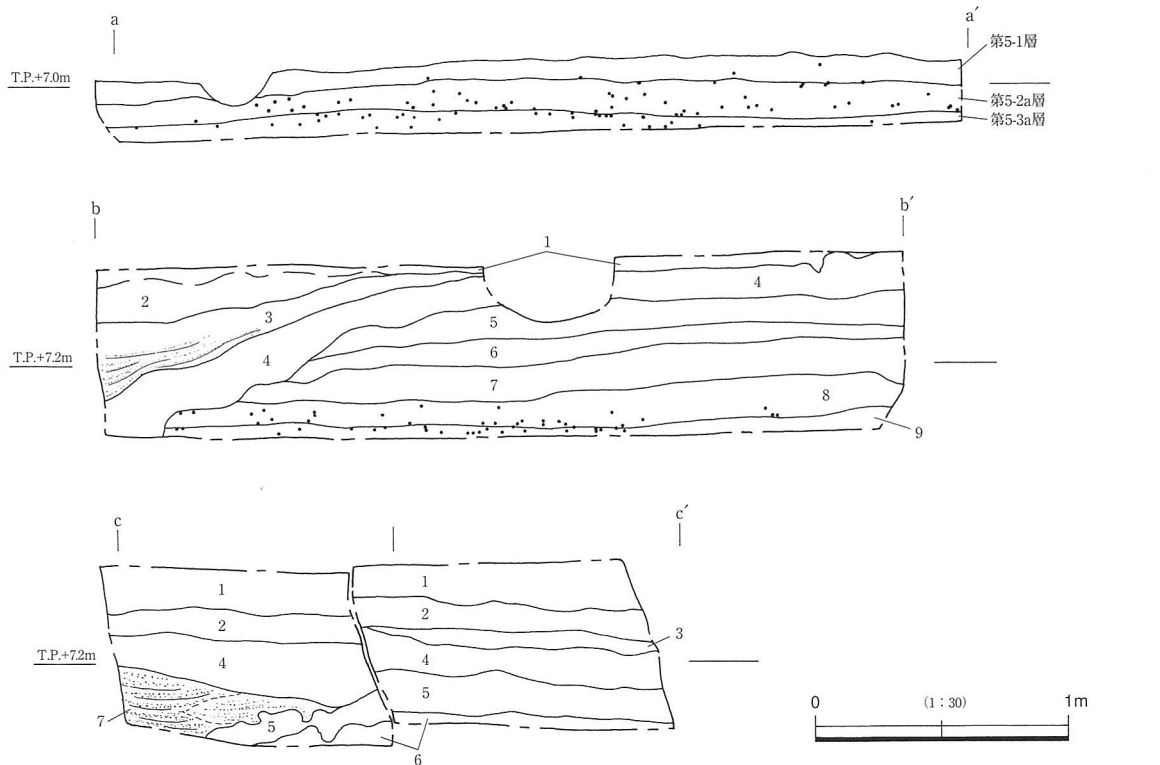


図19 西側下層確認トレンチ石器出土状況

したところ、石器・剥片・碎片および土器片が集中して出土した。トレンチは遺物の分布を追って拡張を繰り返し、最終的に図19のような形となった。この部分の調査においては、第5-1層まではスコップで掘削し、第5-2 a層からは移植ゴテ・竹ベラなどの小道具を用いて調査を進めた。遺物の出土地点は平面図に記録したが、トレンチの拡張単位ごとに取り上げ番号をつけてしまったため、図では頭にW・E・Cというアルファベットをつけて区別した。また、排土についてもブロック割り・水洗をおこない、掘削中に見落とした微細な遺物についても回収するように努めた。今回はトレンチの拡張を繰り返して調査を進めたので、排土の区分が変則的になってしまったこともあり、遺物集中地点を中心にブロック割り・水洗をおこなった。その作業で出土したものの取り上げ単位については、図21に示したカタカナを用いて整理した。なお、掘削時に遺物が希薄であった部分でも一部排土のブロック割りをおこなったが、皆無に近い状態であった。

トレンチ全体の地層の状況をみると、トレンチ西部では第5-2 a層はシルトであったが、中部～東部では砂礫混じりシルトになっていた。この状況は、トレンチ東端に第5-3 a面の流路が存在するこ



b - b'ライン

- 1 5Y5/1 灰 粗砂～細礫質シルト／極粗砂混じりシルト (第4-1 a層)
- 2 10YR4/4 褐 粗砂～中礫 葉理なし、砂礫の間にシルトが入る (10G〔流路])
- 3 5B5/1 青灰 細砂～シルト 上方細粒化の単位が2つ認められる、葉理あり
- 4 N4/0 灰 中砂～粗砂混じりシルト 土壌化 (暗色帯) (第4-2 a層)
- 5 5GY6/1 オリーブ灰 シルト質細～中砂／中砂混じりシルト 上方細粒化 (第4 b層)
- 6 7.5GY6/1 緑灰 中砂混じりシルト (第5-1層)
- 7 10GY4/1 暗緑灰 中砂～細礫混じりシルト シルトのブロック (3mm以下) が多く混じる (擾乱) (第5-2 a層)
- 8 10BG5/1 青灰 中砂～細礫混じりシルト 擾乱受ける、7よりも砂礫の量が少ない (第5-3 a層)
- 9 10G5/1 緑灰 極細砂質シルト 細～中砂若干混じる (第5-3 b層)

c - c'ライン

- 1 N4/0～N3/0 灰～暗灰 中砂～細礫混じりシルト 土壌化 (暗色帯) (第4-2 a層)
- 2 2.5GY5/1 オリーブ灰 中砂～極粗砂混じり細～極細砂質シルト (第4 b層)
- 3 10G5/1 緑灰 細～極細砂質シルト (第5-1層)
- 4 10G4/1 暗緑灰 中砂～細礫混じり細砂質シルト シルトブロック (3mm以下) 多く含む (第5-2 a層)
- 5 10G5/1 緑灰 粗砂～細礫混じりシルト シルトブロック (5mm程度) を多く含む、土壌化 (第5-3 a層)
- 6 5BG4/1 暗青灰 シルト 中砂が若干混じる (第5-3 b層)
- 7 2.5GY6/1 オリーブ灰 中砂～細礫 葉理が認められる (第5-3 a面流路埋積物)

図20 西側下層確認トレンチ断面図

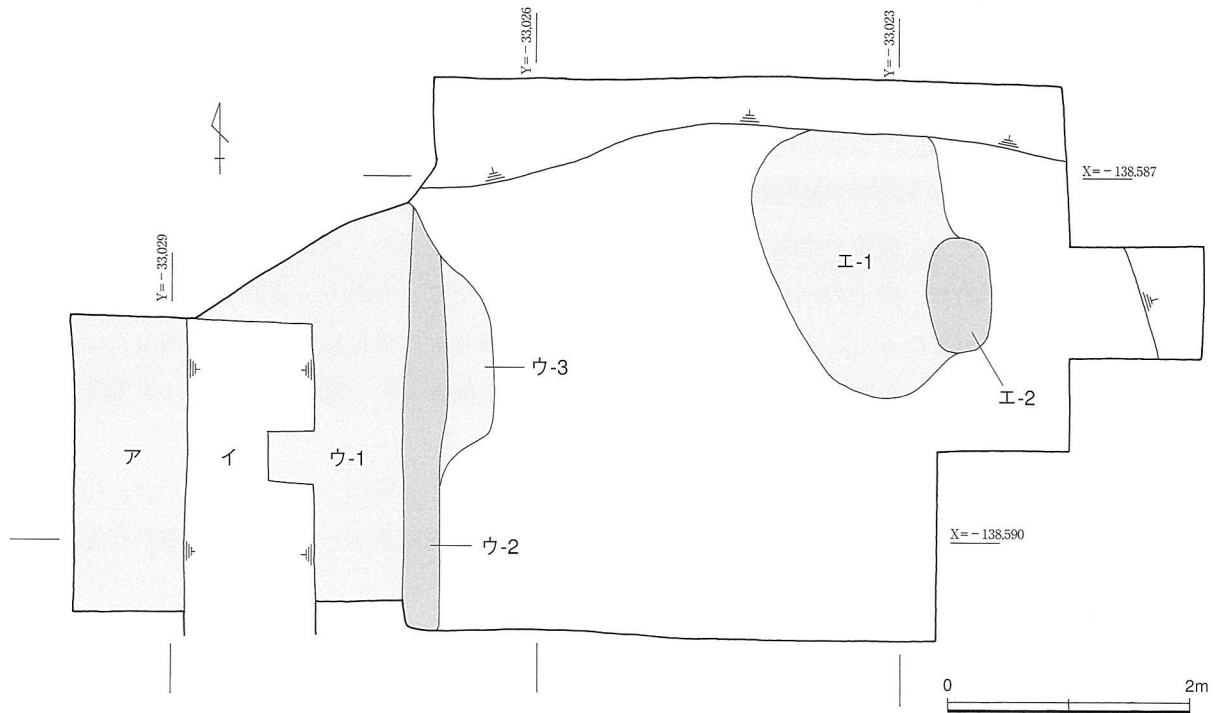


図21 排土採取位置図

と関連している。なお、図19に示したように、トレンチ北端には第4-2 a面106（流路）の肩が存在しており、第5-3 a層は削られて残存していなかった。

サヌカイトの石器・剥片・碎片の集中部分は2ヶ所存在していた（ブロックI・II）。その一部は第5-1層～5-2 a層にも含まれていたが、大半は第5-3 a層から出土したため、本来はこの層準に含まれていたと推定される。遺物の出土レベルをみると、ブロックIは第5-3 a層上面付近に集中し（図20, a-a'）、ブロックIIは第5-3 a層下面付近に集中していた（図20, b-b'）。

ブロックIはトレンチ西部の径4 m弱の範囲に広がっていたが、ブロック割り・水洗で検出されたものも含めた長さ1 cm以下の剥片・碎片は、ブロックの北東部に多い傾向を示した。また、その周囲では1 cm以上の剥片が目立つほか、製品・加工途中品も出土した。土器片についても、中心部よりも周辺部のほうが多かったが、土器の遺存状況がきわめて悪かったため、本来のあり方を示すかどうかは不明である。なお、ここではトレンチ南西隅のものについてもブロックIに含めて考えたが、この部分については調査区外に中心を持つ、別のブロックに含まれる可能性もある。

ブロックIIは径約2 mの範囲に広がっていた。遺物が集中したのはC47・49・53・45を結ぶ部分であり、ブロック割り・水洗で検出された微細遺物の量も多かった。このことからみて、この部分がブロックの中心であったと思われる。このブロックにおいても、製品・加工途中品は周辺部から出土した。

各ブロックから出土した石器類は合計466点であり、そのデータは表1にまとめた。この表では、大きさを示すために長さ・幅を示している。計測にあたっては、原則として打点を上にして長さ・幅を設定した。なお、写真撮影時のミスにより、写真図版10のうち、登録番号271については背面と腹面が逆で、打点も横方向になって写っており、326・269も向きが異なっているので注意されたい。また、石器・剥片・碎片はすべてサヌカイトであったが、その特徴から母岩分類を試みた。微細なものについては誤っている可能性もあり、接合もできなかつたため、あまり意味のあるデータとはいえないが、各ブ

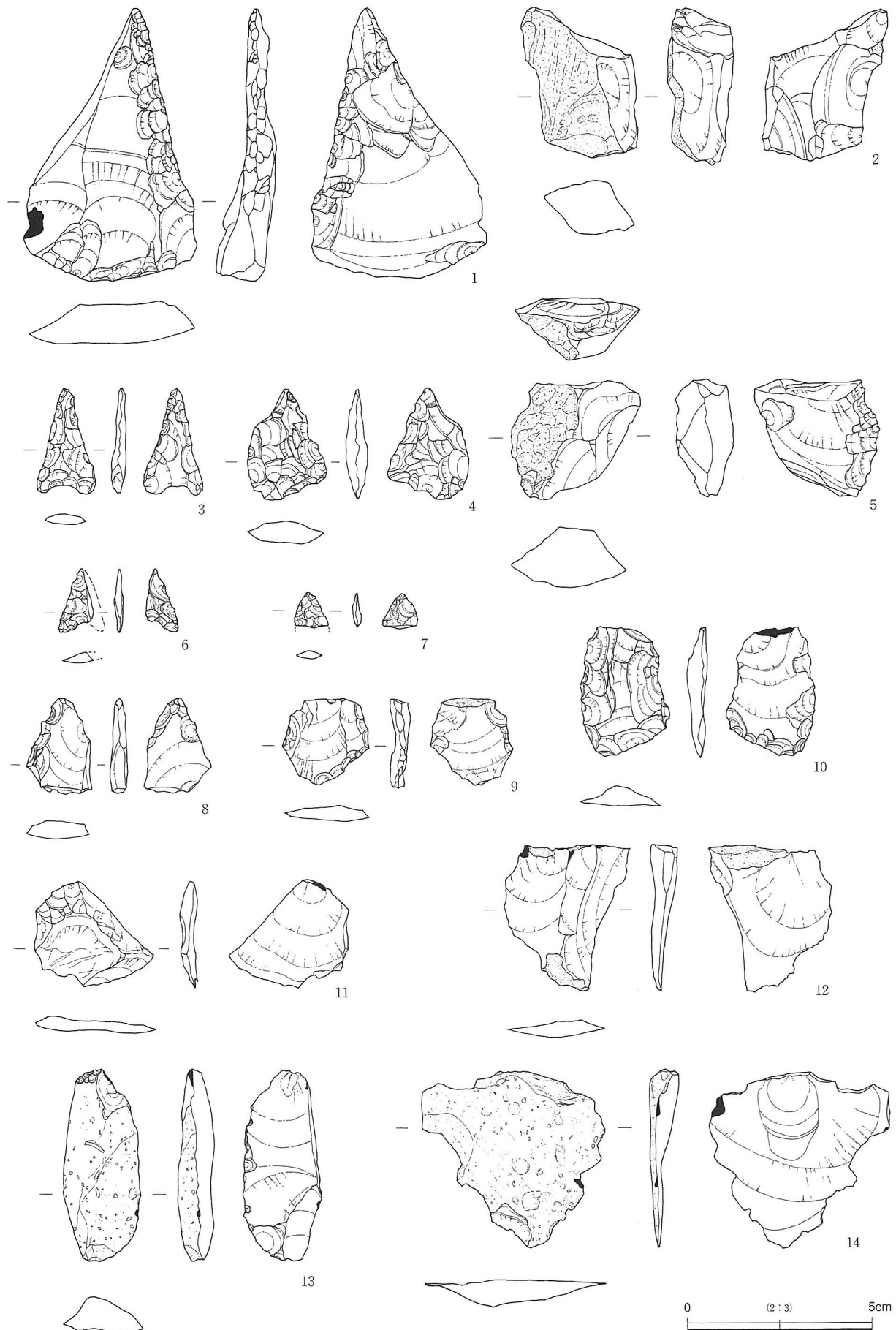


図22 ブロック I 出土石器

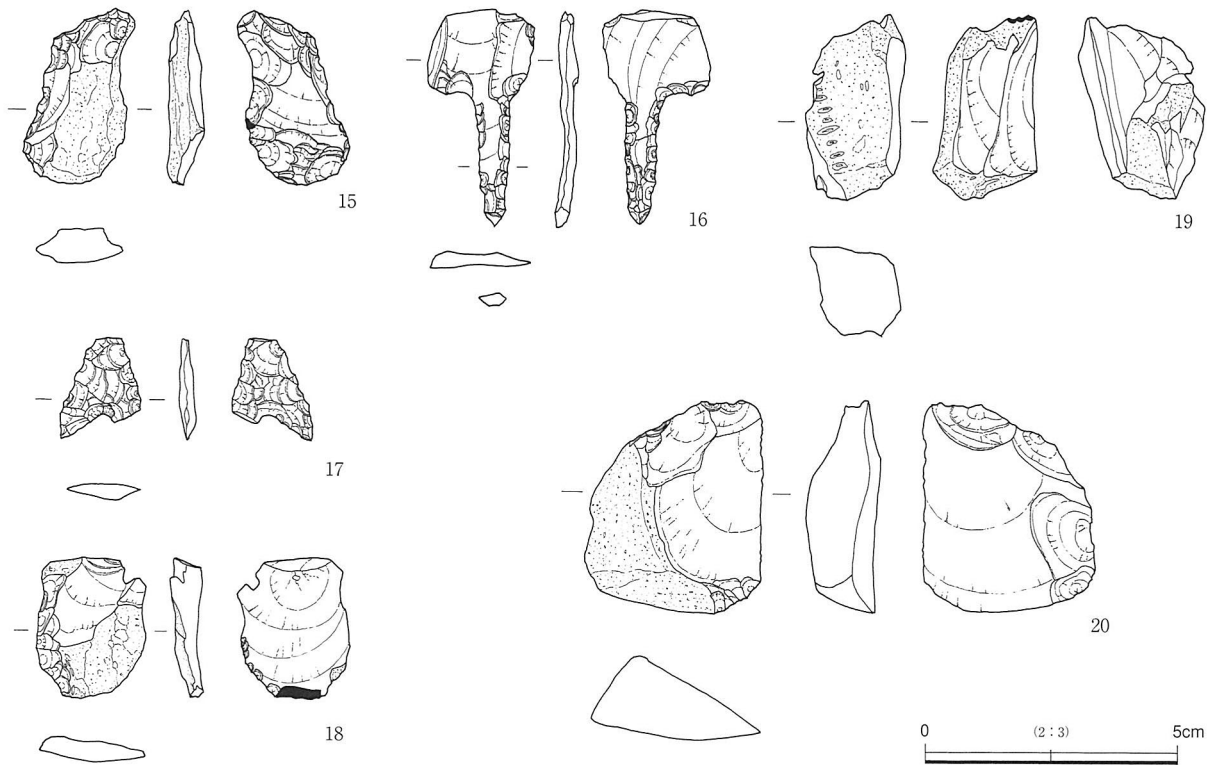


図23 ブロックⅡ出土石器

ロックに複数の原石から剥離されたものが存在している可能性が高いことを示すために、作業段階でつけた記号を掲載した。なお、製品・加工途中品を中心とした石器の実測図は図22・23に示した。

図22には、ブロックⅠから出土したものを示した。(1)は先端が尖り、1側縁に両面から微細剥離を施しているもので、スクレイパーと考えられる。(2)は石核(残核)である。残核のため、剥片剥離技術の詳細は明らかにできないが、剥離が様々な方向からおこなわれていることは注意される。(3)は石鏃である。また、(4)は石鏃の加工途中品、(6・7)は石鏃の破損品と思われる。(8)についても先端を尖らせるような加工が施されており、石鏃の加工途中品の可能性がある。(5)・(9~11)は二次加工のある剥片である。いずれも縁辺に微細剥離が施されている。(12~14)は剥片であるが、このうち(13)は主要剥離面のリングの様子から、両極打法によって剥離された可能性がある。また、(14)は原石から最初に剥離された「礫端片」(竹岡 1989)である。

図23には、ブロックⅡから出土したものを示した。(15)は細長い形状を呈し、側縁には加工が施されている。さらに、上下端には複数の剥離が集中しているが、それらには階段状剥離となったものが目立つ。このような特徴からみて、これは楔形石器の可能性はある。(16)は石錐である。(17)は石鏃の破損品である。また、(18)は1側縁に片面から加工を施して刃部を作り出しており、スクレイパーの可能性はある。(20)は二次加工のある剥片である。

剥片をみると、原礫面を残すものが複数認められ、(14)のような「礫端片」も含まれている。ただし、石核(残核)が2点しか出土していないため、素材の多くは剥片の形で搬入された可能性も考えられる。また、長さ1cm以下の碎片も多数出土しているが、これは主に石器の細部調整に伴うものであろう。碎片の分布を見ると集中部が認められ、その地点で石器の製作がおこなわれたと推定できる。

また、土器については遺存状況がきわめて悪く、図24の(1~3)に示したものののみが実測可能であ

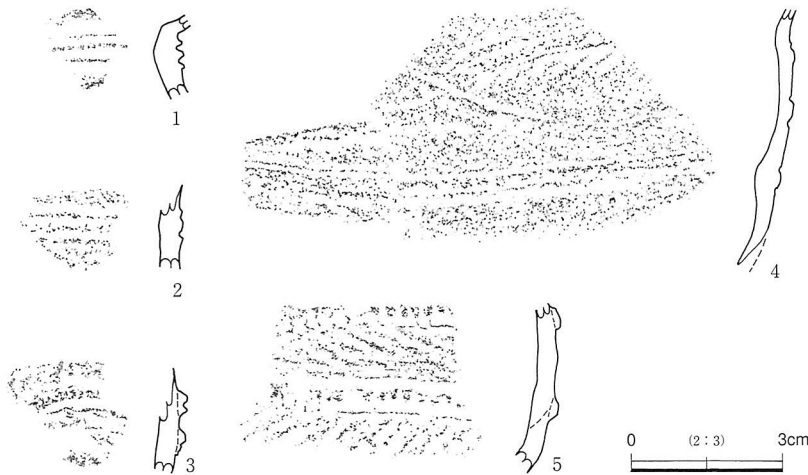


図24 下層確認トレンチ出土土器

った。いずれもブロック I から出土したものである。これらについては突帯の上に半截竹管状工具による押引刺突文が施されている。また、外面の地文は縄文である。こうした特徴からみて、これらの土器片は縄文時代前期後葉の北白川下層Ⅲ式に属する可能性が高い。

以上のことから、西側下層確認トレンチで検出された遺物集

中地点は、縄文時代前期後葉に属する石器製作跡と推定される。ただし、石鏃・石錐・楔形石器・スクレイパーなど、いくつかの種類の商品も出土したため、そうした石器の一部を使用する活動もおこなわれた可能性は否定できない。この石器製作跡が縄文時代前期後葉の土地利用の中でどのように位置づけられるかについては、周辺調査区の成果と合わせて検討していく必要がある。また、ブロック I と II では出土層位に若干の違いがあった。第 5 - 3 a 層の中に含まれる砂礫の大きさや密度をみると、東側のほうが粒度は大きく、量も多いが、これは第 5 - 3 a 層の形成過程において、東端で検出された流路から氾濫堆積物が供給され、層厚を増していったことを示唆する。第 5 - 3 a 層の形成過程をそのように考えれば、遺物の出土層位が異なるブロック I・II の間には、若干の時間差があることになる。

東側の下層確認トレンチにおいては、第 5 - 4 層から土器片が 2 点出土した (図 24 - 4・5)。いずれも突帯の上に押引刺突文を施している。これらについても、縄文時代前期後葉の北白川下層Ⅲ式に属すると考えられる。

参考文献

- 秋山浩三 2002 「大阪府の銚帯」『銚帯をめぐる諸問題』, 奈良文化財研究所, pp.290-310.
- 石井晴司 1995 「篠窯須恵器」, 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』, 真陽社, pp.298-314.
- 井上智博編 2002 『池島・福万寺遺跡』 2, (財)大阪府文化財センター, pp.18-27.
- 尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器椀」, 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』, 真陽社, pp.315-337.
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』, 言叢社, p.49.
- 趙 哲済 1995 「本書で用いる層序学的堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ, (財)大阪市文化財協会, pp.41-44.
- 三好博喜 1989 「第 3 項 縄文土器」『京都府遺跡調査報告書』第 12 冊 志高遺跡, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.46-88.

第5章 まとめ

今回の調査で明らかになった点を時代順に列挙する。

縄文時代に属するものとしては、前期後葉の石器製作跡の検出が特筆される。石器ブロックは2ヶ所確認された。周辺調査区でも前期後葉の土器が出土しており、当時の微地形と土地利用について検討することが課題となる。

弥生時代～古墳時代前期初め頃の遺構としては、流路が検出された。特に、庄内式期に年代の1点を有すると考えられる第4-1面のものには、肩部を人為的に加工した可能性のある部分も存在しており、周辺調査区で検出された遺構との関連が注意される。

また、古墳時代中期に属する土坑が3基検出された。このうち、29（土坑）や37（土坑）から出土した土器は良好な一括資料であり、この時期の土器編年を検討する上で重要な資料となろう。

奈良時代～平安時代初め頃に関しては、石製腰帯具（巡方）が出土した28（土坑）や掘立柱建物である99（建物）が検出された。讃良郡条里遺跡（その3）で検出された建物や井戸などとともに、この時期の土地利用や遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。

なお、遺跡の名前となっている条里型地割の施工時期については、今回の調査でも明らかにできなかった。しかし、第2-1a層～第2-3a層段階の耕作によって、古代の層準が大きく削剥されていることは明らかにできた。第2-3b面83（溝）から出土した瓦器椀からみて、そうした耕作が始まるのは12世紀後半以降と考えられる。

当調査区を含む第二京阪道路に伴う発掘調査は、広い面積を対象にしている。このような場合、調査地全体の層序対比を詳細に検討することが重要となる。ここでは最後に、層序対比を試みる際の問題点についてふれておきたい。

当地域にも有機物・腐植を多く含んだ古土壌（暗色帯）が複数存在しており、層序対比にあたっての目安になると考えられる。ただし、第3a層と第4-2a層の関係のように、場所によって遺存状況が異なる場合もあり、色調などの類似から単純に対比すれば誤りを犯す危険がある。また、堆積は徐々に進行したのではなく、堆積作用が活発な時期と不活発な時期があると考えられる。後者の時期には地層の削剥も起こると予想されるため、場所によって遺存しない層準も出てくる可能性が高い。例えば、第4b層の堆積時期は明らかにできていないが、第5-3a層～第5-1層と第4b層の間に数千年の堆積間隙があったとは考えにくく、第4b層堆積時にかなりの侵食が起こったか、第4b層の上に堆積層や古土壌が存在したものの、第4-2a層と一体化してしまったかのどちらかであろう。仮に後者であるとすれば、調査地周辺で第4-2a層と第4b層の間に別の地層が存在している状況が確認できるかもしれないし、第4b面で縄文時代中～晩期の遺構が検出される可能性もある。この問題は2000年度確認調査区で検出された縄文時代中期前葉～中頃の流路とも関連して、地形形成過程を復原する上でも重要な問題といえる。実際に層序対比の作業をおこなえば、さらに多くの問題点が明らかになると思われるが、確認調査以来蓄積されつつある情報を詳しく検討し、当地域の景観変遷を復原することが今後の課題である。

表1 出土石器一覧表

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器種	母岩分類	挿図番号
65	イ	2.5	2.5	剥片 (原礫面あり)	C	
65	イ	1.8	1.8	剥片 (原礫面あり)	C	
65	イ	2.3	2.3	剥片(原礫面あり)	A2	
65	イ	1.9	2.5	剥片	C	
65	イ	4.8	4.9	剥片 (礫端片)	B	図22-14
65	イ	7.3	4.6	スクレイパー	A2	図22-1
74	ウー1	1.2	2.2	剥片	C	
75	ウー1	2.3	1.3	剥片	C	
75	ウー1	0.7	0.9	碎片	B	
75	ウー1	2.3	2.1	剥片	A1	
75	ウー1	1.45	0.8	石鏃 (破損品)	C	図22-6
75	ウー1	0.8	0.7	碎片	C	
75	ウー1	1.1	1.15	碎片	C	
75	ウー1	0.8	0.8	碎片	B	
75	ウー1	1	0.8	碎片	A1	
75	ウー1	1.35	1.2	碎片	B	
75	ウー1	1.3	0.6	碎片	A1	
75	ウー1	1.9	1.6	剥片 (原礫面あり)	A1	
75	ウー1	0.9	0.9	碎片	C	
75	ウー1	1.1	0.9	碎片	B	
75	ウー1	1	0.9	碎片	B	
75	ウー1	0.8	1	碎片	B	
75	ウー1	0.9	0.7	碎片	B	
75	ウー1	1.6	1.2	碎片	B	
75	ウー1	1.4	1	碎片	A1	
75	ウー1	1.3	1	碎片	C	
75	ウー1	1.5	1	碎片	A1	
75	ウー1	0.7	1	碎片	A1	
75	ウー1	0.8	1	碎片	B	
75	ウー1	0.9	1.15	碎片	C	
76	ア	0.9	1	碎片	A1	
76	ア	0.9	0.9	石鏃 (破損品)	A1	図22-7
76	ア	1.7	1.3	碎片	B	
77	E1	0.6	0.55	碎片	A1	
78	E2	2.5	1.8	石鏃未製品?	C	図22-8
79	E3	1.9	2.1	剥片	C	
80	E4	2.8	3.2	二次加工のある剥片	A2	図22-11
81	E5	1.5	1.6	剥片 (原礫面あり)	C	
81	E5	0.5	1.2	碎片	C	
82	E6	1.5	2.9	二次加工のある剥片	C	
83	E7	1.5	1.3	剥片 (原礫面あり)	C	
84	E8	1.7	1.1	剥片	C	
85	E9	1.7	1.3	碎片	B	
88	E13	0.8	0.65	碎片	B	
89	E14	1.2	1.7	碎片	C	
90	E15	2.3	2.6	剥片	A2	
91	E16	2.3	2.4	剥片	A1	
92	E17	2.4	1.3	碎片	C	
93	E18	0.6	0.6	碎片	C	
94	E20	1.2	2.9	碎片	C	
95	E21	2.6	2.8	剥片	A1	
96	E22	1.9	2	碎片 (原礫面あり)	B	
97	E23	1.8	3.2	剥片 (原礫面あり)	B	
98	E24	2.2	2.8	剥片	C	
99	E25	1.5	0.7	碎片	A1	
100	E26	0.9	1.3	碎片 (原礫面あり)	A1	
101	E27	1	1.2	碎片	B	
102	E28	0.5	0.8	碎片	C	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
103	E29	0.9	1.1	碎片	C	
104	E30	1.9	1.4	碎片	C	
105	E31	0.6	0.9	碎片	A2	
106	E32	0.6	0.6	碎片	C	
107	ウー1	1.2	0.9	碎片	A2	
107	ウー1	0.4	0.55	碎片	A2	
107	ウー1	0.4	0.5	碎片	A2	
108	ウー1	0.7	0.9	碎片	B	
108	ウー1	1.1	0.9	碎片	B	
109	W2	1.8	1.2	碎片	C	
117	W10	5	3.2	石核	A1	図22-2
119	W12	3	2.2	石鏃未製品	A1	図22-4
120	W13	0.9	1.8	剥片 (原礫面あり)	A2	
121	W14	2.6	1.5	剥片	C	
122	W15	1.6	3	剥片	C	
123	W16	0.9	0.7	碎片	B	
124	W17	2.1	2.5	剥片 (原礫面あり)	B	
125	W18	1	0.75	碎片	B	
126	W19	0.6	1.6	碎片	C	
127	W20	3	4	二次加工のある剥片 (原礫面あり)	B	図22-5
128	W21	0.85	0.95	碎片	B	
129	W22	0.7	0.6	碎片	B	
130	W23	0.8	1	碎片	B	
131	ア	1.7	2.3	剥片	C	
131	ア	0.6	0.9	碎片	A1	
131	ア	0.6	0.7	碎片	C	
131	ア	1.4	1	碎片	A2	
131	ア	0.7	1	碎片	C	
131	ア	0.9	1	碎片	A1	
133	E33	2.1	2.25	剥片 (礫端片)	A1	
134	E34	0.85	0.85	碎片	C	
135	E35	5.3	2	剥片 (背面は原礫面、両極打法?)	A2	図22-13
136	E36	0.6	0.5	碎片	B	
137	E37	1.05	0.8	碎片	B	
138	E38	1	0.7	碎片	B	
139	E39	0.9	1.8	碎片 (原礫面あり)	B	
140	E40	1.3	1.5	碎片	B	
141	E41	1.9	1.4	碎片	B	
142	E42	0.6	1	碎片	A1	
143	E43	0.6	1.1	碎片	A2	
144	E44	0.9	1.5	碎片	C	
145	E45	0.3	0.9	碎片	B	
146	E46	1.1	1.3	碎片	A1	
147	E47	2.2	2	剥片 (原礫面あり)	B	
148	E48	0.6	0.7	碎片	B	
149	W24	2.1	3.1	剥片 (礫端片)	A2	
150	W25	3.8	1.5	石鏃	B?	図22-3
151	ウー1	0.5	0.5	碎片	B	
151	ウー1	0.4	1.15	碎片	A1	
151	ウー1	0.6	0.6	碎片	B	
151	ウー1	0.8	0.5	碎片	B	
151	ウー1	1	1.25	碎片	B	
151	ウー1	0.9	0.6	碎片	B	
151	ウー1	0.3	0.5	碎片	B	
151	ウー1	0.4	0.4	碎片	B	
222	出土地点不明	0.8	1	碎片	B	
223	C1	1.5	1.8	剥片 (原礫面あり)	B	
225	C3	2.3	2.2	二次加工のある剥片 (原礫面あり)	B	図22-9
227	C5	2.35	2.4	剥片	C?	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器種	母岩分類	挿図番号
228	C6	1.15	1.4	剥片	B?	
229	C8	2.3	1.7	剥片	B?	
234	C13	0.7	1.3	剥片	E	
235	C14	3	1.35	剥片	C?	
236	C15	3	2.1	剥片 (原礫面あり)	D?	
239	C18	2.1	1.7	剥片 (原礫面あり)	E?	
240	C19	1.6	1.55	剥片 (原礫面あり)	E?	
244	C24	3	2.2	剥片 (原礫面あり)	E	
245	C25	4.1	2.5	石核	D	図23-19
246	C26	4.25	2	石錐	D	図23-16
247	C27	1.7	2.1	剥片 (原礫面あり)	E	
248	C28	2.4	1.4	剥片 (原礫面あり)	D	
249	C29	3.5	1.8	楔形石器? (原礫面あり)	H	図23-15
250	C31	4.7	3.7	二次加工のある剥片 (原礫面あり)	E	図23-20
251	C32	1.2	1.6	剥片 (原礫面あり)	D	
252	C33	0.95	1.25	剥片	E	
253	C34	3.9	2.7	剥片 (原礫面あり)	E	
254	C35	0.7	0.5	剥片	E	
255	ウー3	1.6	1.1	剥片	B	
255	ウー3	0.4	0.2	剥片	B	
256	C37	1	0.6	剥片 (原礫面あり)	E	
257	C38	1.8	0.9	剥片	E	
258	C39	0.9	0.65	剥片	E	
259	C40	0.85	0.5	剥片	D	
260	C41	2	1.15	剥片	E	
261	C42	0.9	0.5	剥片	D	
262	C43	0.75	1.2	剥片	E	
263	C44	1.15	0.7	剥片	D	
264	C45	1.45	0.95	剥片	D	
265	C46	1	1.1	剥片	D	
266	C47	1	0.9	剥片	E	
267	C48	1.2	2.4	剥片 (原礫面あり)	E	
268	C49	1.4	1.3	剥片	E	
269	C50	1.1	0.7	剥片	G	図版10
270	C51	1.4	1.5	剥片	E	
271	C52	0.8	1.9	剥片	D	図版10
272	C53	1	1.4	剥片	D	
273	C54	1.15	1.6	剥片	D	
274	C55	1.1	0.3	剥片	D	
275	C56	0.9	1.3	剥片	B	
276	C57	1.6	1.7	剥片 (原礫面あり)	B	
277	C58	1.1	1.3	剥片	A1	
278	C59	1.3	1.3	剥片	B	
280	C61	0.9	1.6	剥片	B	
282	C63	1.45	2.4	剥片	B	
283	C64	2.9	2.3	剥片	B	
284	C65	1.5	0.5	剥片	A1	
285	C66	1.5	2	剥片	A1	
286	C67	2	3.4	剥片	A2	
288	C69	0.6	1	剥片	A1	
289	C70	0.4	1.1	剥片	A1	
291	C72	1.3	1.4	剥片	A1	
294	C75	2.1	2.5	剥片 (礫面剥片)	B	
295	C76	1.3	3	剥片 (原礫面あり)	B	
296	C77	1.8	2	剥片	B	
297	C78	1.5	2.3	剥片	C	
298	C79	1	0.65	剥片	B	
299	C80	1.1	1	剥片	B	
300	C81	2.5	3	剥片 (原礫面あり)	B	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
301	エー1	1.4	1	碎片	E	
301	エー1	0.4	0.4	碎片	E	
302	エー1	1.3	1.7	剥片	D	
302	エー1	0.5	0.4	碎片	E	
302	エー1	0.8	0.9	碎片	E	
302	エー1	0.5	0.6	碎片	F	
305	C82	1.2	0.9	碎片	D	
306	C83	1	1.8	碎片	E	
307	C84	0.5	0.65	碎片	E	
308	C85	2	1.6	石鏃	E	図23-17
309	C86	1	0.6	碎片	E	
310	C88	0.9	1.2	碎片	E	
312	C92	0.8	0.7	碎片	E	
314	C95	1.2	1.3	碎片	E	
315	C96	1	1.15	碎片	D	
316	C97	2.6	2.1	剥片 (打点・バルブ折り取られる)	E	図版10
317	C98	0.7	1.3	碎片	D	
318	C99	0.6	1	碎片	E	
319	C100	1.7	1.3	碎片	E	図版10
320	C101	1.3	1.3	碎片	E	
321	C102	0.5	0.4	碎片	E	
322	C103	0.7	1.3	碎片	D	
323	C104	0.5	0.8	碎片	E	
324	C106	1.9	2.4	剥片 (原礫面あり)	E	
325	C107	0.8	1	碎片	D	
326	C108	2.4	2.1	剥片	F	図版10
327	C109	0.8	1.1	碎片	E	
328	エー2	0.6	0.9	碎片	E	
328	エー2	0.6	0.85	碎片	E	
328	エー2	0.7	0.6	碎片	E	
328	エー2	0.7	0.9	碎片	E	
328	エー2	1.4	0.5	碎片 (原礫面あり)	E	
329	エー2	0.8	0.9	碎片 (背面は原礫面)	D	
329	エー2	1.1	1	碎片	D	
329	エー2	0.4	0.7	碎片	D	
329	エー2	0.4	0.5	碎片	E	
329	エー2	0.7	0.8	碎片	E	
329	エー2	0.9	0.7	碎片	D	
329	エー2	1.1	0.4	碎片	D	
329	エー2	0.4	0.3	碎片	E	
329	エー2	0.5	0.5	碎片	D	
329	エー2	0.8	0.6	碎片 (原礫面あり)	E	
329	エー2	0.9	0.9	碎片	D	
329	エー2	0.7	0.6	碎片	D	
329	エー2	0.7	0.6	碎片	E	
330	C110	1.5	2	剥片	E	
331	C111	3.45	2.5	二次加工のある剥片	I	図22-10
332	C112	4.1	3.6	剥片 (原礫面あり)	B	図22-12
335	C115	0.65	0.55	碎片	B	
336	C116	1.8	3.1	剥片 (礫端片)	B	
337	C117	1.5	1.1	碎片	C	
338	C118	0.8	1	碎片	C	
339	C119	1.6	1	碎片	B	
340	C120	0.9	0.7	碎片	C	
341	C121	1.05	0.6	碎片	B	
342	C122	0.9	1.5	碎片	B	
343	C123	1.3	1.6	剥片	B	
344	C124	0.5	0.4	碎片	A1	
345	C125	3.2	2.7	剥片 (原礫面あり)	A1	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
346	C126	1.8	1.4	碎片	B	
347	C127	1.2	1	碎片	B	
349	C129	0.8	1	碎片	B	
350	C130	0.6	1	碎片	B	
351	エー2	0.6	0.6	碎片	D	
351	エー2	0.5	0.7	碎片	E	
351	エー2	0.6	0.6	碎片	E	
351	エー2	0.3	0.4	碎片	D	
351	エー2	0.4	0.6	碎片	D	
351	エー2	1.8	0.8	碎片 (原礫面あり)	E	
351	エー2	1.2	0.9	碎片	E	
351	エー2	0.3	0.3	碎片	E	
351	エー2	0.65	0.15	碎片	D	
351	エー2	1.35	1.1	碎片	E	
351	エー2	0.8	0.75	碎片	E	
351	エー2	0.3	0.3	碎片	E	
351	エー2	0.3	0.4	碎片	E	
351	エー2	1.2	1.9	碎片	E	
351	エー2	0.4	0.45	碎片	E	
351	エー2	0.5	0.6	碎片	F	
351	エー2	0.25	0.5	碎片	E	
351	エー2	0.6	1.1	碎片 (原礫面あり)	E	
351	エー2	0.6	0.7	碎片	E	
351	エー2	0.6	1	碎片 (原礫面あり)	D	
351	エー2	0.3	0.9	碎片	E	
352	エー2	0.8	0.9	碎片	E	
352	エー2	0.75	1	碎片	E	
352	エー2	0.8	0.4	碎片	E	
352	エー2	0.3	0.5	碎片	D	
352	エー2	0.4	0.5	碎片	D	
352	エー2	0.45	0.25	碎片	D	
353	エー1	1.4	0.75	碎片	E	
353	エー1	1	0.6	碎片	E	
353	エー1	0.5	0.4	碎片	E	
353	エー1	0.4	0.4	碎片	E	
353	エー1	0.3	0.55	碎片	E	
353	エー1	0.7	0.4	碎片	E	
353	エー1	0.6	0.8	碎片	E	
353	エー1	0.4	0.45	碎片	E	
353	エー1	0.3	0.6	碎片	E	
353	エー1	0.5	0.55	碎片	E	
353	エー1	0.4	0.55	碎片	E	
353	エー1	0.3	0.3	碎片	E	
353	エー1	0.3	0.4	碎片	E	
353	エー1	0.9	0.9	碎片	E	
354	ウー2	1.5	1.3	碎片	B	
354	ウー2	1.1	1.4	碎片	B	
354	ウー2	0.4	0.5	碎片	B	
354	ウー2	0.2	0.3	碎片	A2	
354	ウー2	0.5	0.3	碎片	A2	
354	ウー2	0.4	0.5	碎片	B	
354	ウー2	1.2	0.5	碎片	A2	
354	ウー2	0.65	0.5	碎片	B	
354	ウー2	0.2	0.6	碎片	A2	
354	ウー2	0.25	0.3	碎片	B	
354	ウー2	0.6	0.8	碎片	A2	
354	ウー2	1	1.2	碎片	C	
355	エー1	0.6	0.2	碎片	D	
355	エー1	0.9	0.5	碎片	D	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
356	ウー2	1.7	2.6	剥片	A1	
356	ウー2	1	1.5	碎片	B	
356	ウー2	2.5	3.2	剥片 (原礫面あり)	B	
356	ウー2	1.5	1.1	碎片	A1	
356	ウー2	0.9	1	碎片	B	
356	ウー2	0.6	0.8	碎片	A1	
356	ウー2	0.9	0.5	碎片	C	
356	ウー2	0.7	0.9	碎片	B	
356	ウー2	0.4	0.5	碎片	B	
356	ウー2	0.9	0.5	碎片	B	
356	ウー2	0.6	0.5	碎片	A1	
356	ウー2	0.4	0.4	碎片	A1	
356	ウー2	0.4	0.6	碎片	B	
356	ウー2	0.6	0.3	碎片	B	
356	ウー2	0.35	0.4	碎片	B	
356	ウー2	0.3	0.5	碎片	B	
356	ウー2	0.3	0.25	碎片	B	
356	ウー2	0.4	0.9	碎片	A1	
356	ウー2	1.3	1.5	碎片	B	
356	ウー2	0.2	0.2	碎片	B	
356	ウー2	0.65	0.6	碎片	B	
356	ウー2	0.9	0.5	碎片	C	
356	ウー2	0.5	0.3	碎片	B	
356	ウー2	0.5	0.4	碎片	A1	
356	ウー2	0.4	0.4	碎片	B	
356	ウー2	0.4	0.3	碎片	B	
356	ウー2	0.5	0.35	碎片	B	
357	エー1	0.5	0.75	碎片 (原礫面あり)	E	
357	エー1	0.3	0.3	碎片	E	
357	エー1	0.3	0.5	碎片	E	
358	ウー2	0.6	0.7	碎片	B	
358	ウー2	0.7	0.45	碎片	B	
358	ウー2	0.4	0.7	碎片	C	
358	ウー2	0.5	0.3	碎片	B	
358	ウー2	0.8	0.35	碎片	C	
358	ウー2	0.4	0.2	碎片	B	
359	ウー2	2	1.7	剥片 (原礫面あり)	A2	
359	ウー2	1.3	1.5	剥片	A2	
359	ウー2	0.8	1	剥片	A2	
359	ウー2	0.8	1	碎片	A2	
359	ウー2	0.9	0.9	碎片	A2	
359	ウー2	0.85	0.7	碎片	B	
359	ウー2	1.35	1.35	碎片	A2	
359	ウー2	0.9	0.85	碎片	C	
359	ウー2	1	0.9	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.4	碎片	B	
359	ウー2	1	1	碎片	A2	
359	ウー2	0.6	0.7	碎片	B	
359	ウー2	0.9	0.7	碎片	B	
359	ウー2	0.65	0.4	碎片	B	
359	ウー2	0.3	0.7	碎片	B	
359	ウー2	0.9	0.9	碎片	B	
359	ウー2	0.6	0.8	碎片	B	
359	ウー2	1	0.9	碎片	B	
359	ウー2	0.6	0.8	碎片	C	
359	ウー2	0.6	0.4	碎片	B	
359	ウー2	0.7	0.65	碎片	B	
359	ウー2	0.5	0.7	碎片	C	
359	ウー2	0.4	0.5	碎片	A2	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
359	ウー 2	0.4	0.4	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.7	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.35	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.8	碎片	A2	
359	ウー 2	0.9	0.7	碎片	C	
359	ウー 2	0.7	1.2	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.8	碎片	A2	
359	ウー 2	1	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.7	0.5	碎片	B	
359	ウー 2	0.7	0.85	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.7	碎片	A2	
359	ウー 2	0.5	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.7	0.8	碎片	A2	
359	ウー 2	0.4	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.25	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.3	0.7	碎片	B	
359	ウー 2	0.3	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.35	碎片	B	
359	ウー 2	1.4	0.9	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.5	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.8	0.7	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.7	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.8	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.7	碎片 (原礫面あり)	A2	
359	ウー 2	0.5	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.8	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.5	碎片	A2	
359	ウー 2	0.7	0.7	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.3	0.25	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.4	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.45	碎片	C	
359	ウー 2	0.5	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.55	0.4	碎片	B	
359	ウー 2	0.35	0.55	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.5	碎片	A2	
359	ウー 2	0.5	0.55	碎片	A2	
359	ウー 2	0.25	0.25	碎片	B	
359	ウー 2	0.55	0.5	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.2	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.75	碎片	B	
359	ウー 2	0.9	1.5	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.65	碎片	C	
359	ウー 2	0.3	0.4	碎片	C	
359	ウー 2	0.3	0.25	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.5	0.55	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.5	碎片	A2	
359	ウー 2	0.4	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.3	0.3	碎片	B	
359	ウー 2	0.35	0.5	碎片	B	
359	ウー 2	0.35	0.25	碎片	B	
359	ウー 2	0.4	0.6	碎片	B	
359	ウー 2	0.6	0.6	碎片	B	

登録番号	取り上げ番号・地点	長さ (cm)	幅 (cm)	器 種	母岩分類	挿図番号
359	ウー2	0.2	0.4	碎片	B	
359	ウー2	1.1	0.6	碎片	C	
359	ウー2	0.6	0.4	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.5	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.2	碎片	B	
359	ウー2	0.3	0.4	碎片	B	
359	ウー2	0.2	0.3	碎片	B	
359	ウー2	0.3	0.25	碎片	B	
359	ウー2	1.4	0.7	剥片	B	
359	ウー2	0.3	0.35	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.3	碎片	B	
359	ウー2	0.25	0.15	碎片	A2	
359	ウー2	0.3	0.3	碎片	B	
359	ウー2	0.35	0.3	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.25	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.3	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.5	碎片	B	
359	ウー2	0.2	0.2	碎片	B	
359	ウー2	0.3	0.4	碎片	B	
359	ウー2	0.2	0.2	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.35	碎片	B	
359	ウー2	0.35	0.2	碎片	B	
359	ウー2	0.4	0.2	碎片	B	
359	ウー2	0.7	0.35	碎片	B	
359	ウー2	0.5	0.4	碎片	C	
360	C131	2.8	2	スクレイパー? (原礫面あり)	E	図23-18
361	ウー2	1.4	1	碎片	A2	
361	ウー2	0.35	0.5	碎片	B	
361	ウー2	0.6	0.5	碎片	B	
361	ウー2	1.2	0.8	碎片	B	
361	ウー2	0.5	0.7	碎片	B	
361	ウー2	0.9	0.6	碎片	B	
361	ウー2	0.6	0.75	碎片	B	
361	ウー2	0.8	0.8	碎片	B	
361	ウー2	0.7	0.6	碎片	B	
361	ウー2	0.5	0.7	碎片	A2	
361	ウー2	0.3	0.35	碎片	B	
361	ウー2	0.2	0.7	碎片	B	
361	ウー2	0.6	0.7	碎片	B	
361	ウー2	0.6	0.5	碎片	B	
361	ウー2	0.25	0.4	碎片	B	
361	ウー2	0.5	0.3	碎片	B	
361	ウー2	0.2	0.2	碎片	B	
361	ウー2	0.25	0.6	碎片	B	
361	ウー2	0.4	0.8	碎片	B	
361	ウー2	0.6	0.7	碎片	B	
361	ウー2	0.5	0.9	碎片	B	
361	ウー2	0.4	0.3	碎片	A2	
361	ウー2	0.3	0.35	碎片	B	
361	ウー2	0.3	0.25	碎片	B	
361	ウー2	0.2	0.1	碎片	B	
361	ウー2	0.65	0.6	碎片	B	
361	ウー2	1.1	0.9	剥片	C	
361	ウー2	0.5	0.4	碎片	B	

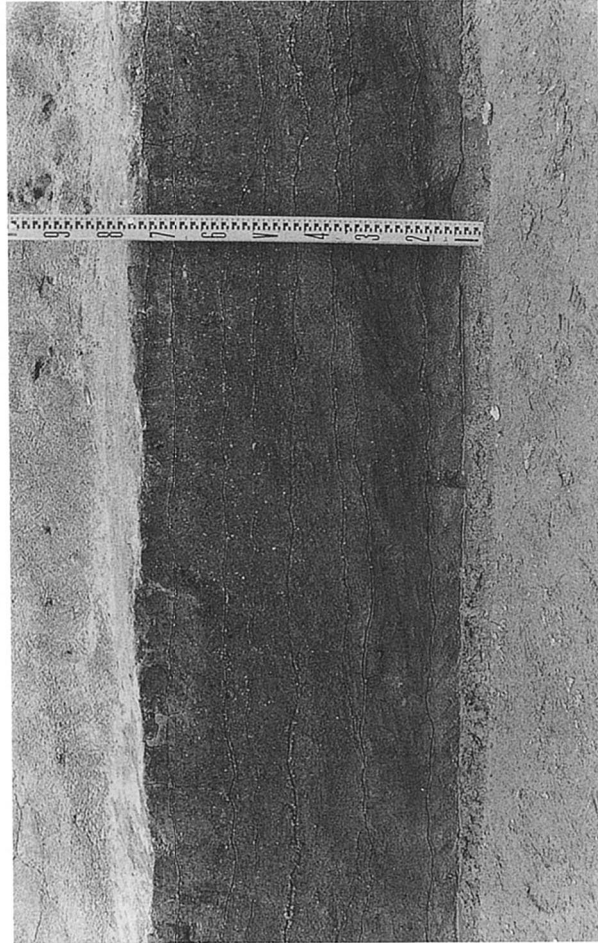


図解4階下迄の地盤中、国土地理院のTKY2 JGDにより変換をおこなった JGD2000系のX、Yを表示しています。

測量 平成14年 8月
測量 平均 平成14年 8月
測量 図 平成14年 8月
測量 系 第 V 号
測量 系 第 V 号
測量 系 第 V 号
測量 系 第 V 号

図25 航空測量平面図

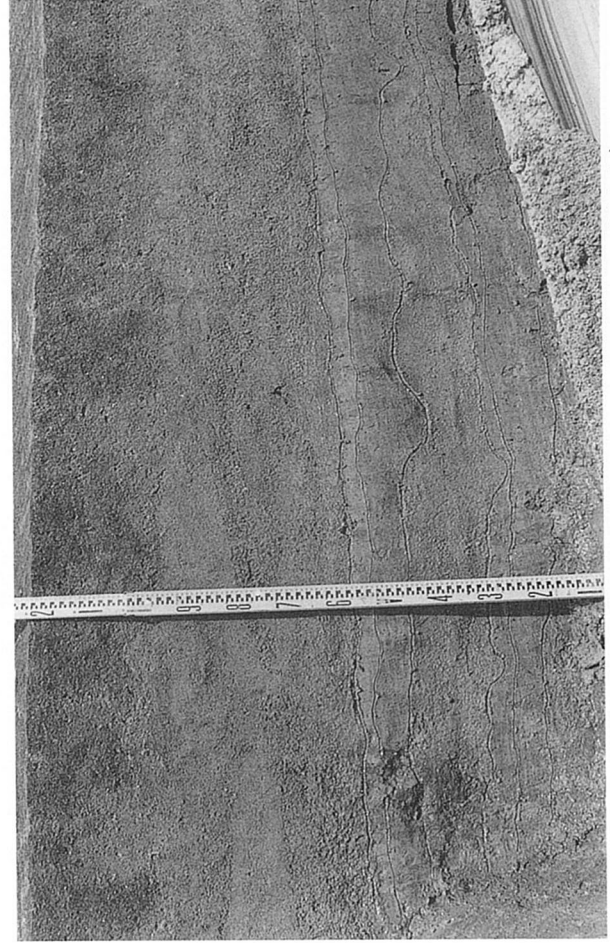
写 真 图 版



1 第1a層～第4-2a層 (図5, f-gライン, 南東から)



2 第2-1a層～第4-2a層 (図5, a-bライン, 南東から)



3 第4b層～第5-4層 (図6, i-jライン, 西から)



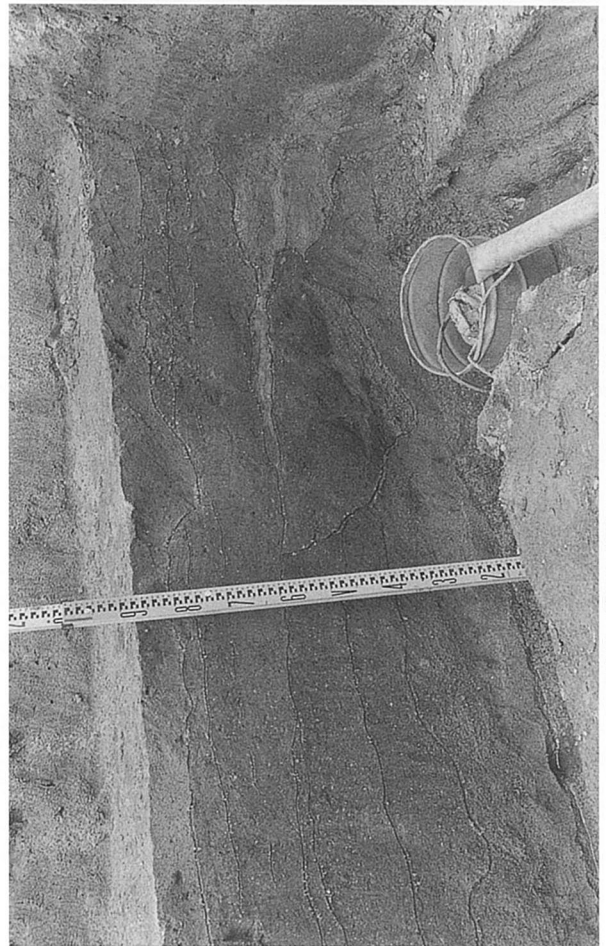
4 第4b層～第5-3b層 (図6, k-lライン, 東から)



5 12(溝) 断面(図9, a-a' ライン, 南から)



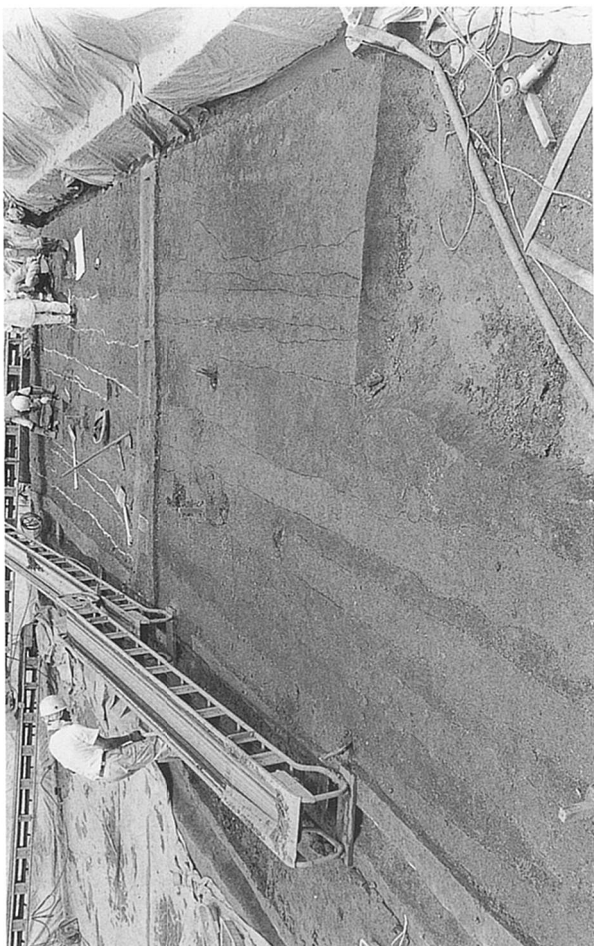
6 12(溝) 埋積物の斜交層理の傾き(南から)



7 12(溝) 断面(図9, b-b' ライン, 南から)



8 12(溝)・58(土坑)の切り合い(南西から)



10 調査区西半 第2-3b面遺構検出状況 (南から)



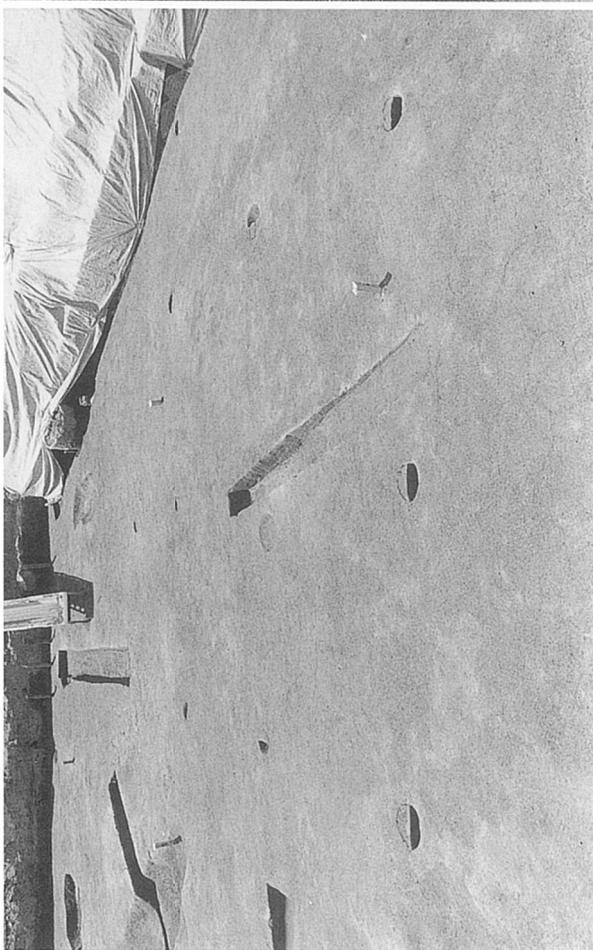
12 83 (溝) 土器出土状況 (南から)



9 調査区西半 第2-3b面遺構断面 (南西から)



11 89 (溝) 底面の状況 (南から)



13 99 (建物) 全景 (東から)



14 調査区西半 第3a層 (北から)



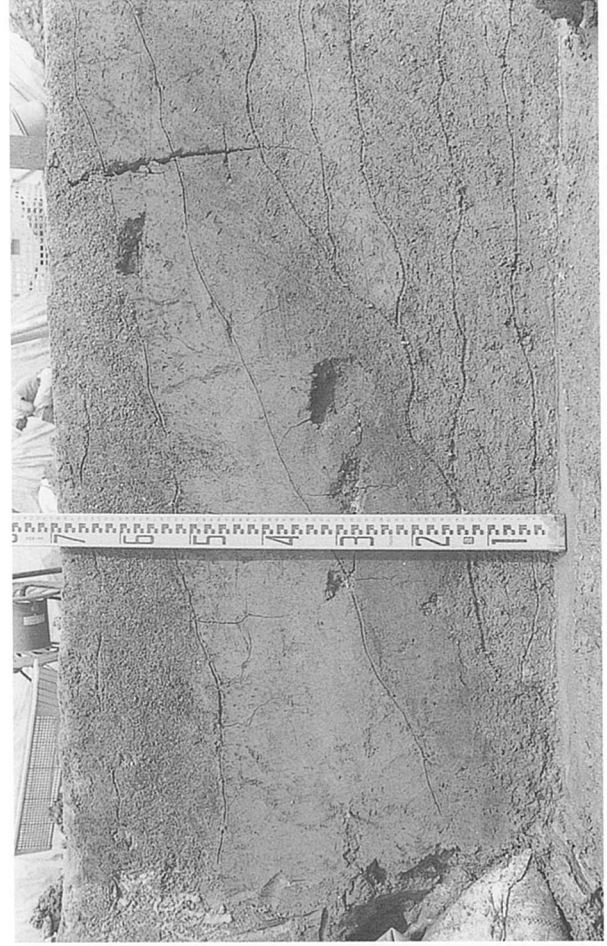
15 29 (土坑) 土器出土状況 (南から)



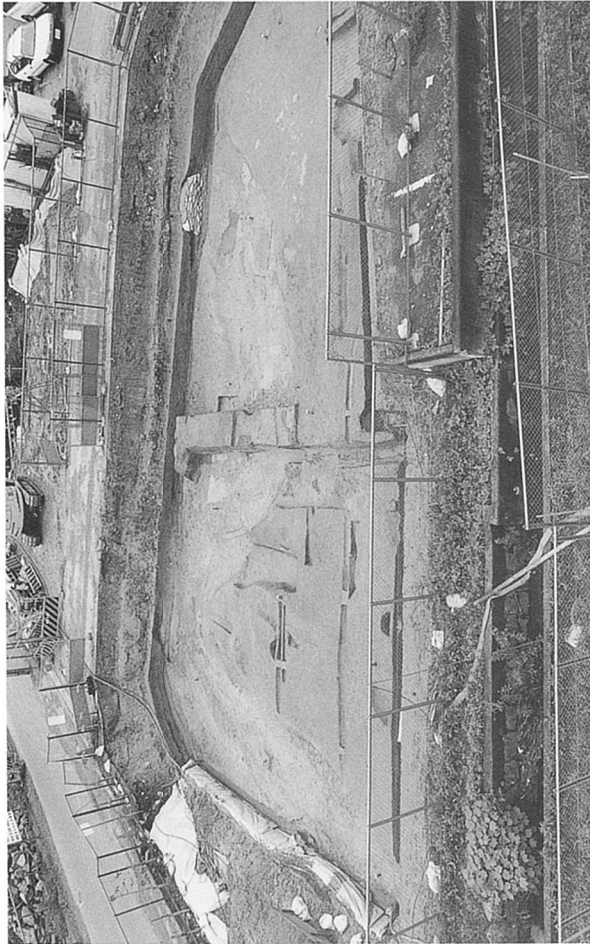
16 58 (土坑) 土器出土状況 (北西から)



18 48 (流路) 断面 (北から)



20 106 (流路) 断面 (図20, b-b' ライン, 西から)



17 48 (流路) 全景 (東から)



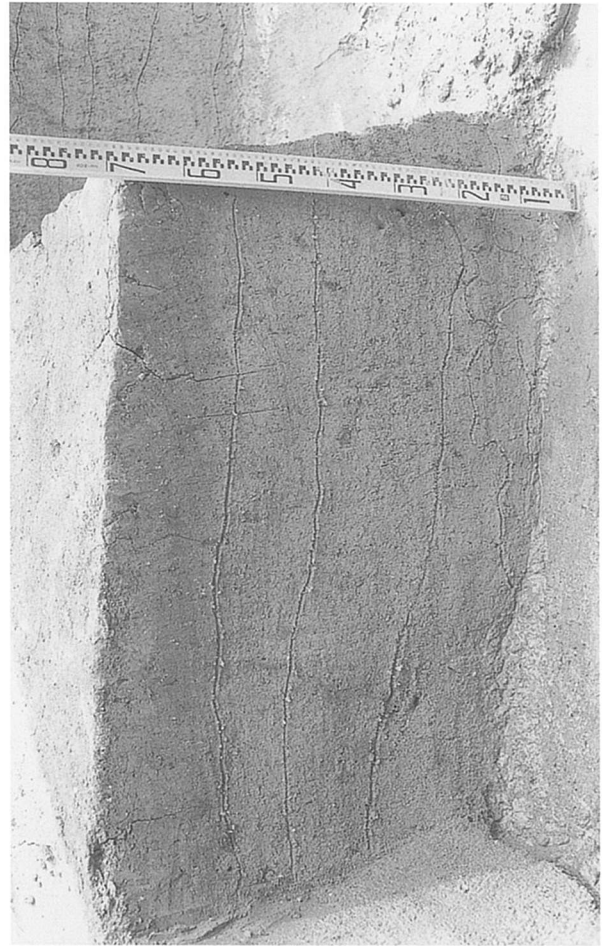
19 52 (流路) 断面 (南東から)



22 ブロックⅡ石器出土状況（北西から）



21 ブロックⅠ石器出土状況（南西から）



24 西側トレンチ 第5-3a面流路断面（北から）

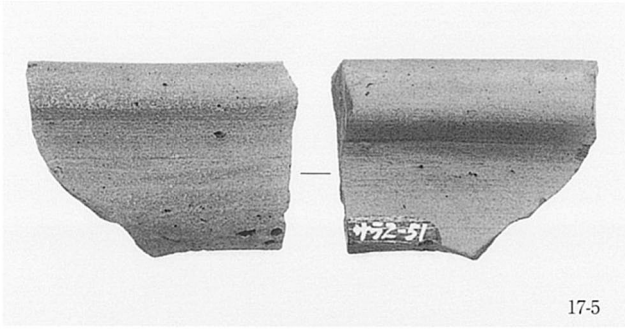


23 東側トレンチ 第5-2a層（南から）



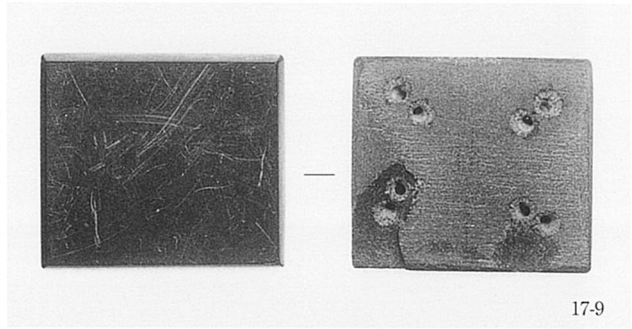
調査区垂直写真

写真図版 8 出土遺物①



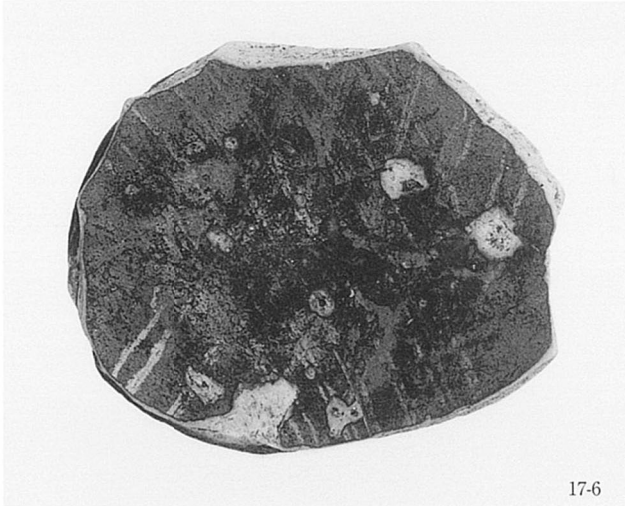
12 (溝)

17-5



28 (土坑)

17-9



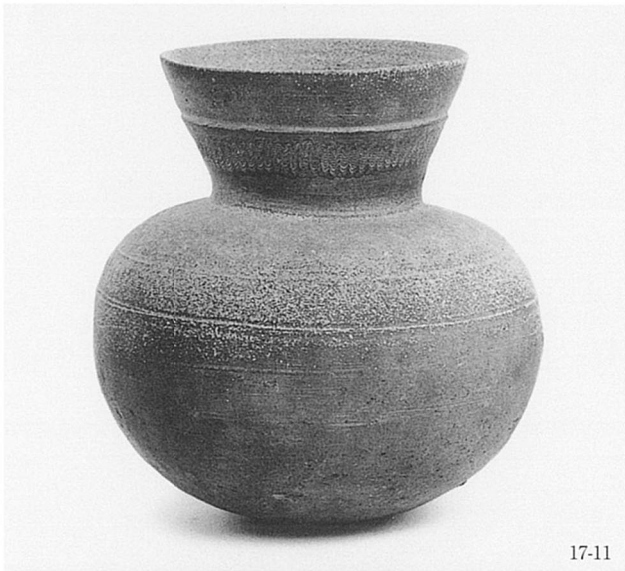
83 (溝)

17-6

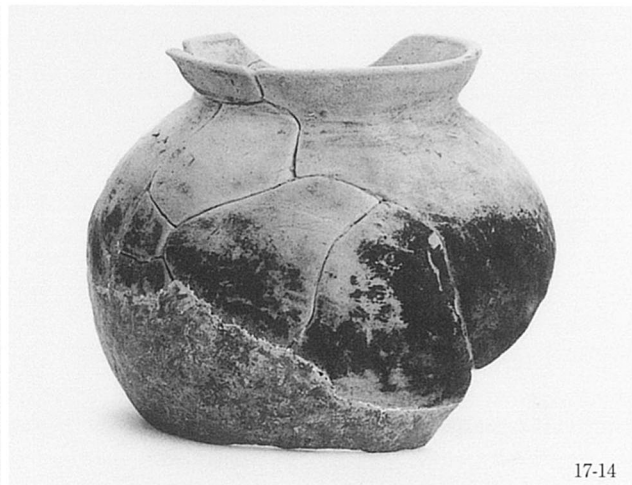


第2-1 a層

17-10



17-11



17-14

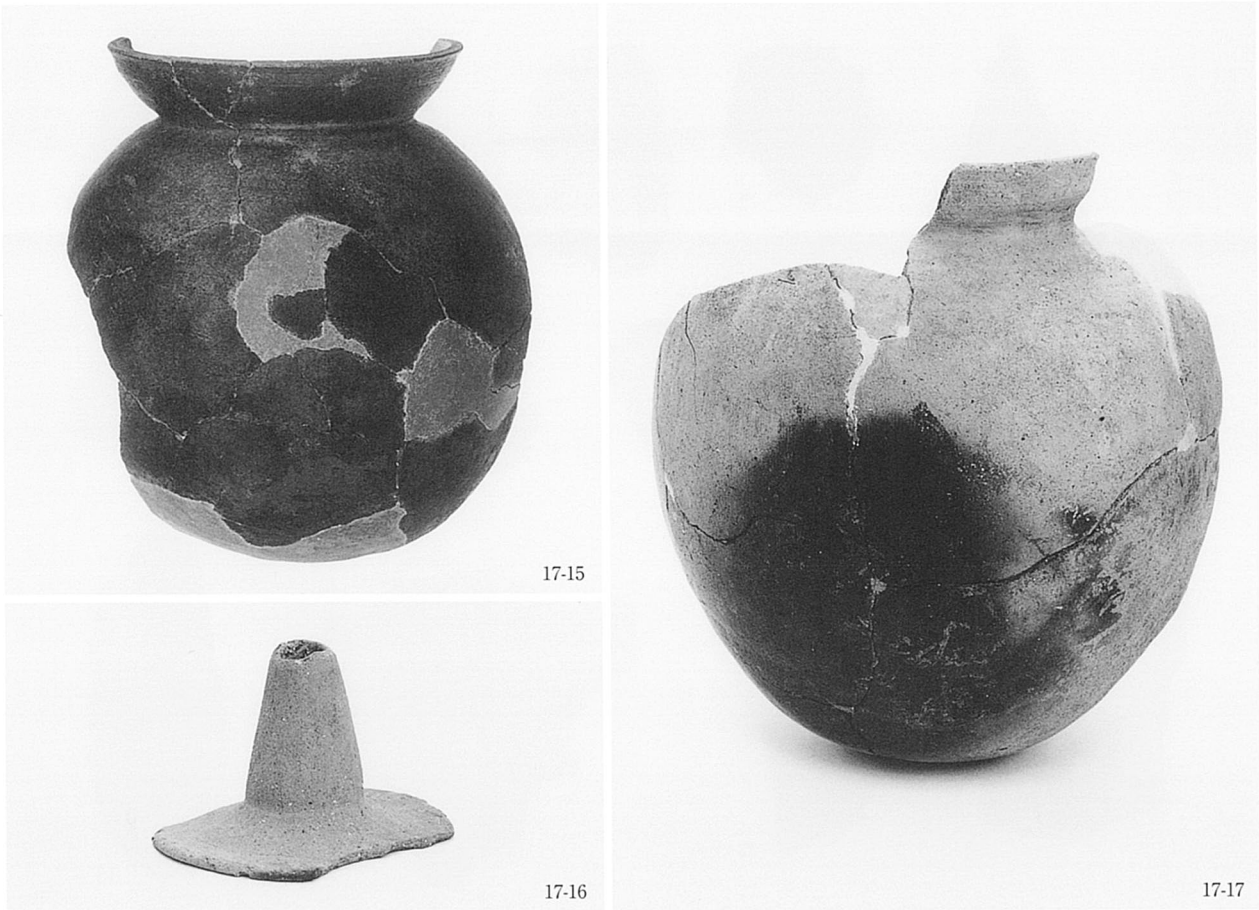


17-12

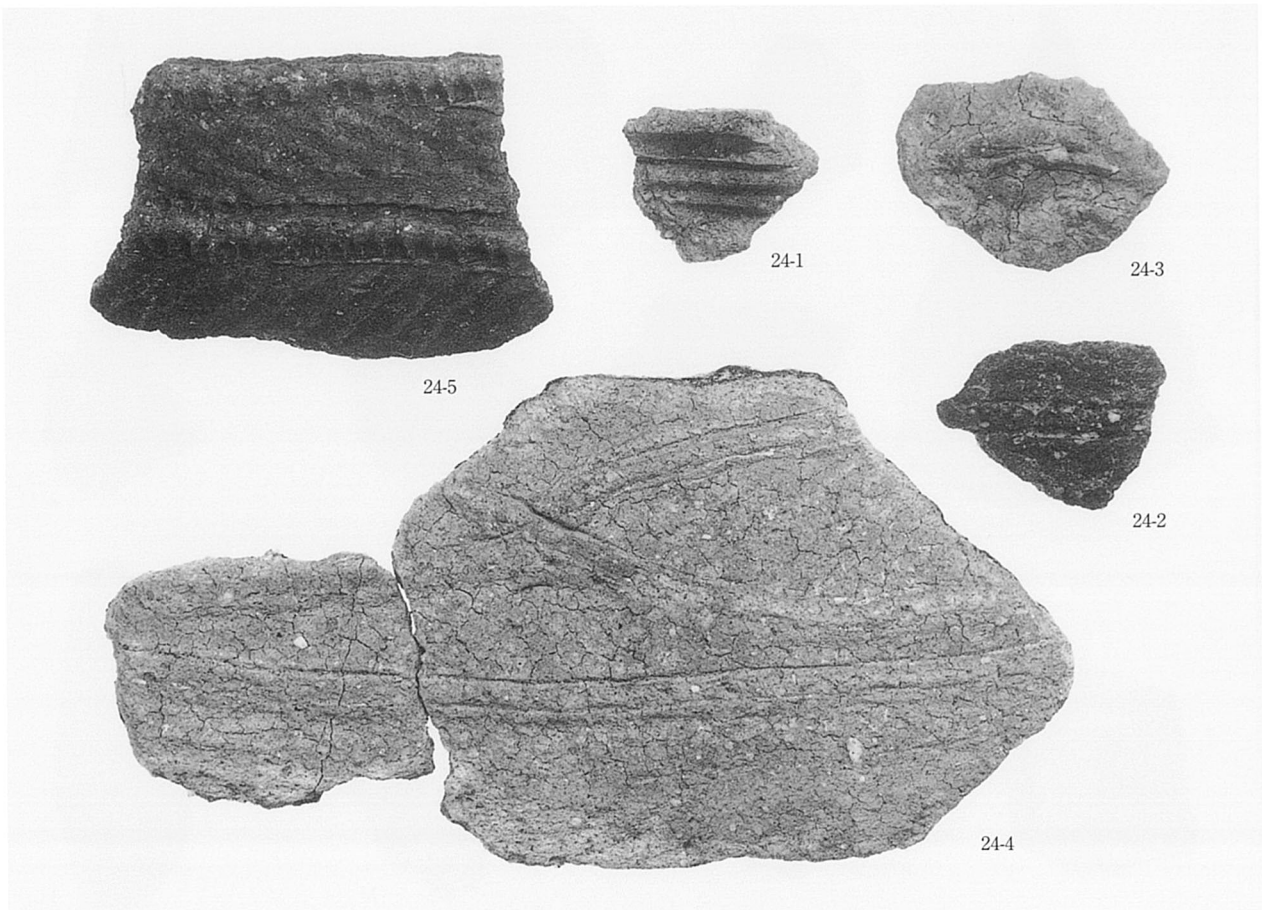


17-13

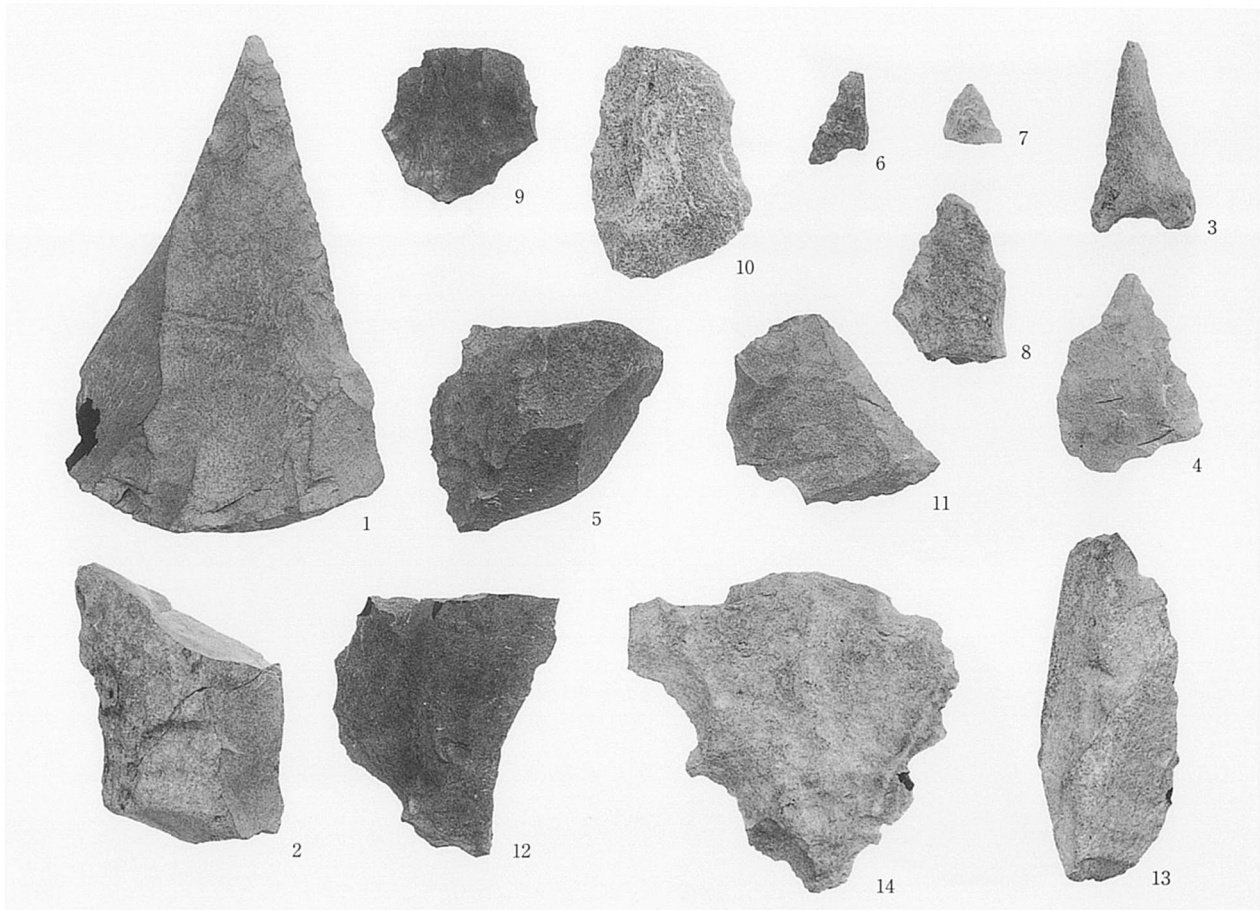
29 (土坑)



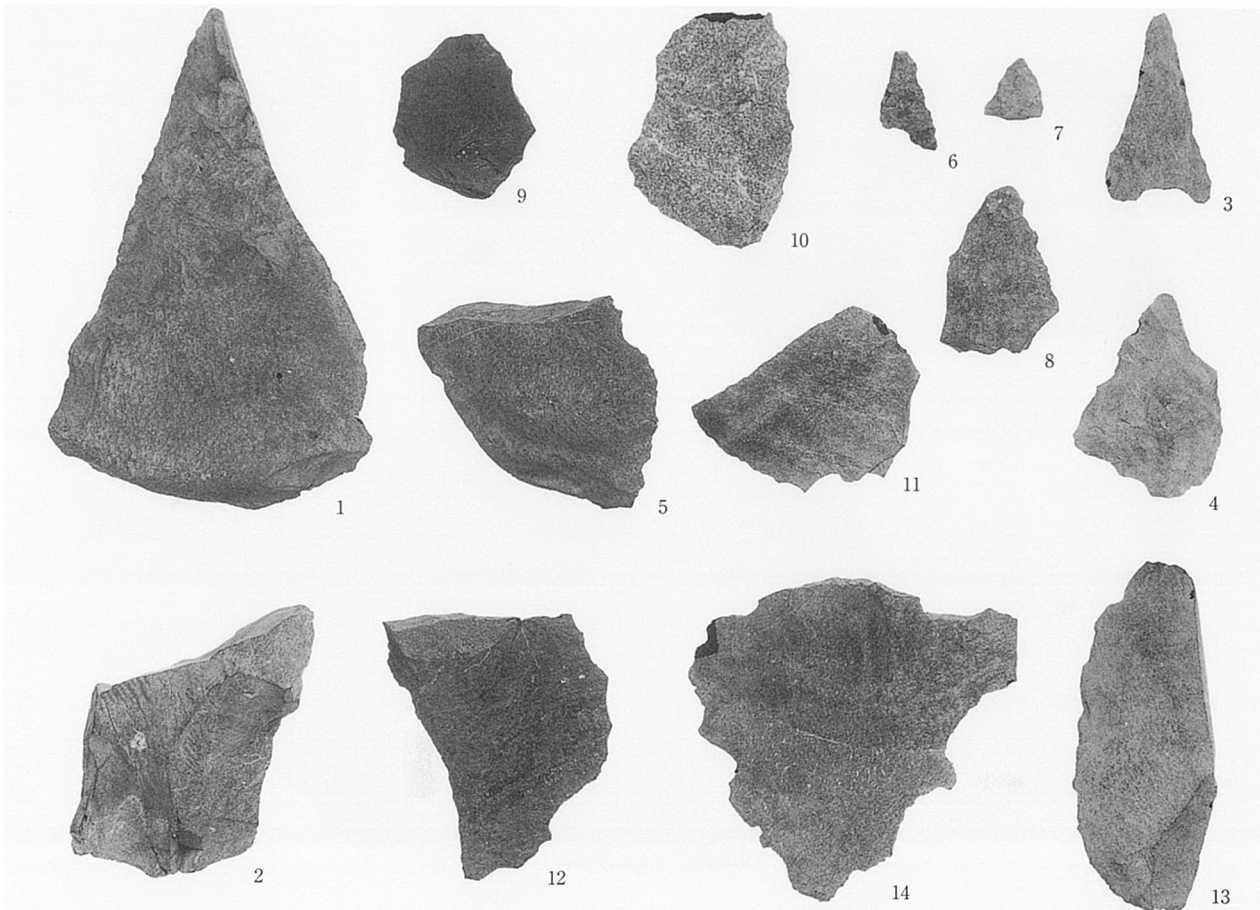
左上 58 (土坑), 左下・右 37 (土坑)



ブロック I (1~3), 第5-4層 (4・5)

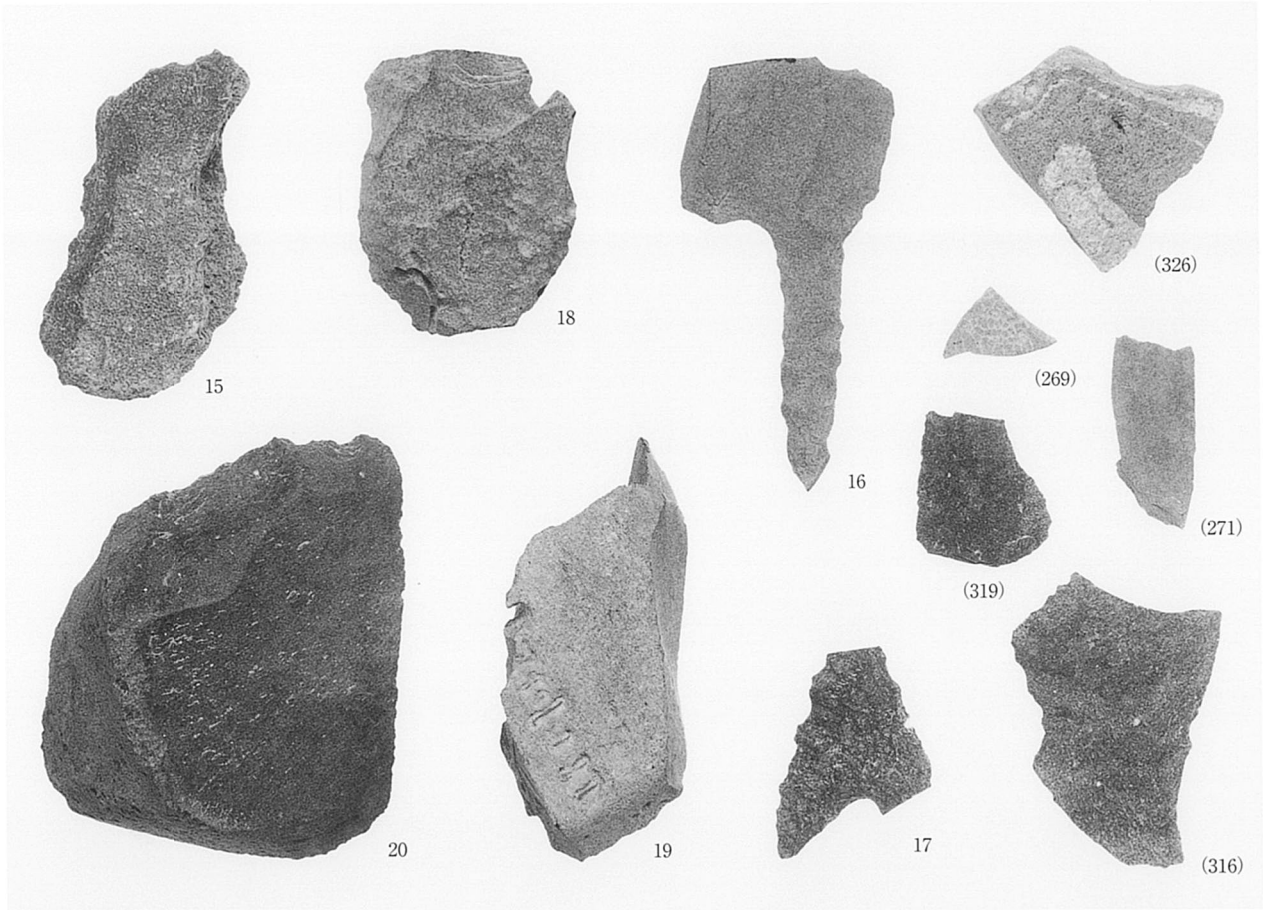


(背面)

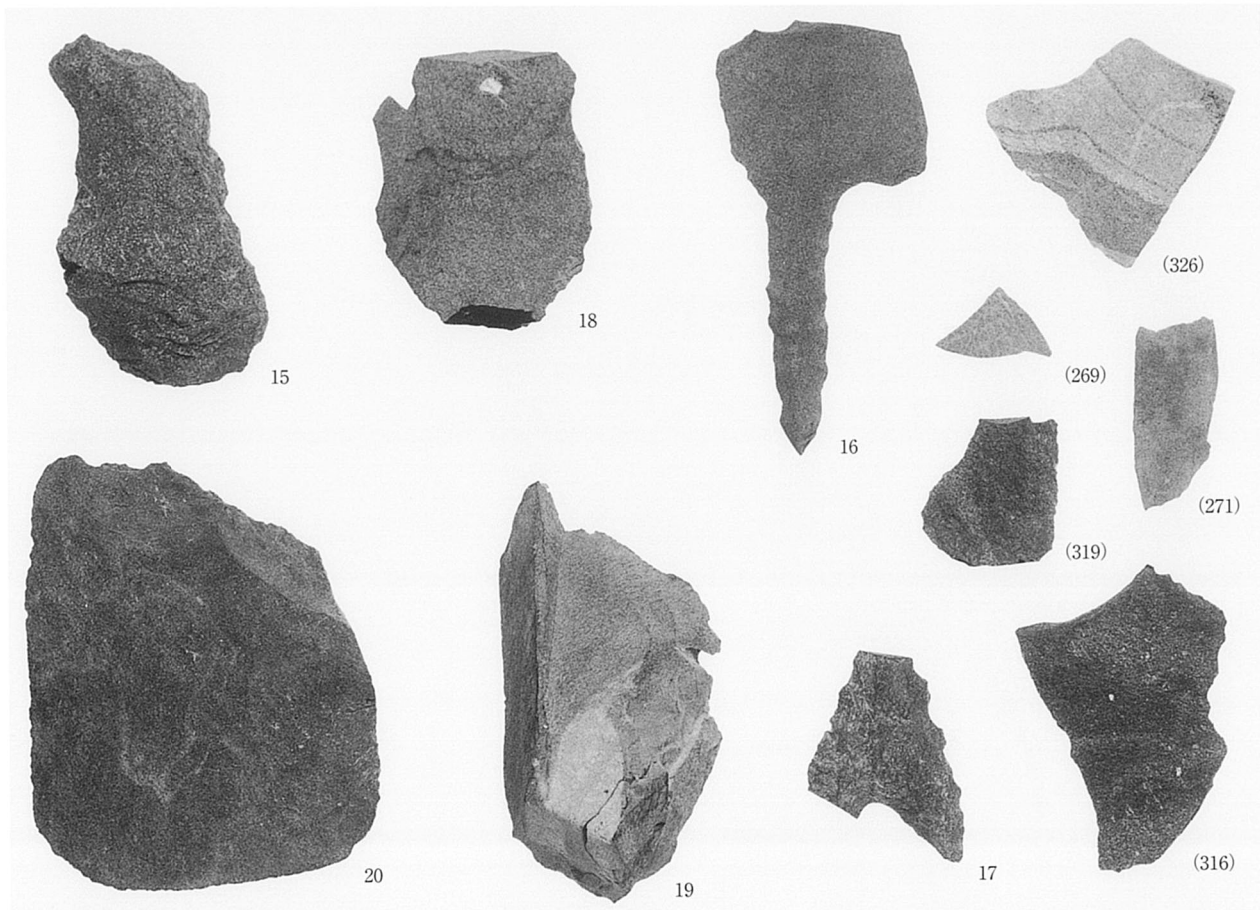


ブロック I 出土石器

(腹面)



(背面)



(腹面)

ブロックⅡ出土石器

() 内の数字は登録番号

報告書抄録

ふりがな	さらぐんじょうりいせき その2							
書名	讃良郡条里遺跡（その2）							
副書名	第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	井上智博・多賀晴司							
編集機関	（財）大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2003年6月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわし たかみや 寝屋川市高宮	27215	36	34° 45' 11"	135° 38' 10"	2002年3月1日 ～2003年2月28日	544㎡	第二京阪 道路（大 阪北道路） 建設に伴う
所収遺跡名	種 別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
讃良郡条里遺跡	集落	縄文～中世	石器ブロック 掘立柱建物・ 土坑・溝・ 流路	石器・縄文土器・ 土師器・須恵器・ 石製巡方・瓦器	縄文時代前期後葉の石器製作跡を検出			

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第98集

讃良郡条里遺跡（その2）

第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日：2003年6月30日

編集・発行：（財）大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

大阪府教育委員会文化財調査事務所3階

T E L 072-299-8791 F A X 072-299-8905

印刷・製本：（株）中島弘文堂印刷所